

特251
39
5
5

本喜代藏著

信仰の世界

(靈化册子^{ベシヤク}三)

312

始

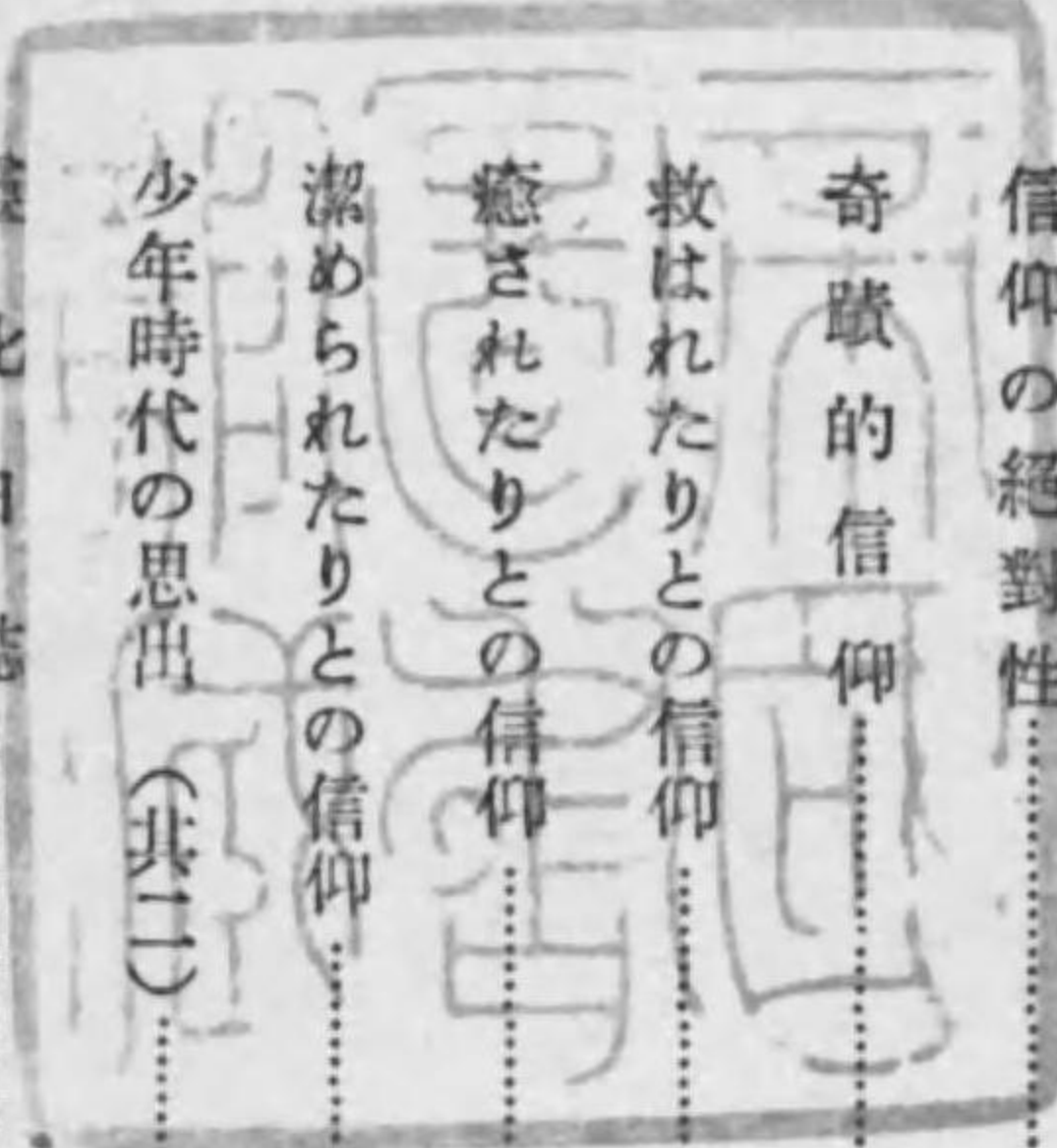


第251
39

信仰の世界

目次

信仰の世界.....	1
信仰の絶對性.....	10
奇蹟的信仰.....	10
救はれたりとの信仰.....	19
癒されたりとの信仰.....	19
潔められたりとの信仰.....	25
少年時代の思出 (其二).....	25
靈化日誌.....	65
讀者の聲.....	93



信仰の世界

武本喜代藏

信仰の世界

一

信仰の世界は法悦ほうえつの境きょう、懐あこがれの極み、歡喜の世界であります。そこには何らの疑ひも、理念もありません。神と一なる平和と満足あるのみです。宗教の歸趣きしゆは結局神と人との親しい直接の交際で、「我もなく世もなく只主のみませり」てふ強い自覺の中にあります。従つて信仰には人種や宗派しゅうはいの差別なく、神學や、教義の争ひもありません。凡は神の子であり、兄弟であつて暖い聖愛に包つつまれてゐる。彼らは感極つて泣くのです、喜びの餘りに握手し、接吻せつぶんするのであります。信仰の世界は罪なく、無邪氣で、嬰兒あやなごの世界であります。希望に輝かがやいてゐます。人間は罪を犯し

一

て衰弱し、老耄しました。神は人間より若くあります。神との交際は私共が青春を恢復する唯一の秘訣であります。下等動物や、嬰兒は死を恐れませんが、否死を知りません。死は眠る也と謂はれた主イエスと同じ境地であります。母の死の床で「母ちゃん寝んねしてゐる」と喜んでゐます。彼らは無論無智の結果だが、大人は智慧の木の果を喰べた爲、肉體の死を極度に恐れ、墓畔に泣き崩れてゐます。私共は信仰の世界に立返り、死を再検討せねばなりません。而してモツと明るい、快活な死生觀を抱かねばならんと思ひます。

信仰の世界は孤獨で、靜かで而も動いてゐます。卑俗な社交によつて慰安を求めません。神と偕なる最高實在の直接感によつて深刻な感激に充たされるのであります。神の現前を信じ、其御聲を聴きつゝ歡喜に躍るのです。其生活は活々として力強く、愛に燃えへてゐます。そこには此世的差別がありません。敵をも祝福するのであります。世亂れ、教會が俗化するや、人心は飢え疲れ、かゝる純眞な世界を求め出すのであります。

信仰の世界は靈的一致と、兄弟の親交であります。「信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし」使二・四四云々「日々心を一つにして弛みなく宮に居り、家にてパンをさき、歡喜と眞心とをもて食事をなし」云々こそ初代信徒の理想的生活で、信仰の世界の如何に、尊く、美しきかを示してゐます。「主の僕の睦まじさは、天なる御民のさまに似たり」です。心も言も合ひます、願ひも望みも一つです。此世のみならず、未來永遠變らぬ友垣であります。

無論惡魔はそんな親しい靈的交際を妨げんとして、或は偽善者を起し、或は妬みや、誤解を以て打壊しを始めます。が併しそれは彼らが麥の如く篩はれ、穀と實がハツキリ別たるべき信仰の試練であつて寧ろ感謝すべきであります。かくて純眞のものゝみ一つと成り、理想的なる信仰の世界が現出するのであります。國境や教派の隔てがありません。教派を異にし、意見を別にし、千里萬里を隔てゝゐても、心は一つです。靈的親交は何時まで絶えないのであります。

二

保元平治この方、天下は刈菰と亂れ、若き物は續々戦場の露と消え、源平争亂の眞ツ只中に地震は起り、飢饉甚しく、疫病火災に引續いて盜賊横行し、商賣は衰え、親子兄弟離散の外なく、人をして轉た人生の無常を感じしむるの時、佛教は墮落し、俗化して、徒らに貴族社會の鼻息を伺ひ、其趣好に投ぜんとのみ努めてゐました。併しながら人心は之に満足せず、一般民衆は勿論貴族階級の人々まで心から新生命ある宗教の出現を望んでゐたのであります。

此時に當り、其時潮に應じ、救世の悲願やみ難く世に現はれたのが黒谷の法然房で、一心一向の淨土眞宗は起つて來たのであります。此世の事の頼み難きを感じ、未來に生きんとする願望から念佛によりて成佛せんとするもの續出し、影の形に應ずる如く天下靡然として歸依讚嘆し時めく雲の上人も、賤が伏屋の男女迄六字の妙號を唱へぬものなきに到つたのであります。

熊谷直實が吉水の草菴に、法然房を尋ねた時の光景は、やゝ劇化された感なきにあらずだが、彼の感激性と、法然の悠然たる態度、堅固なる信念とは流石阪東武者の荒くれ男をして只もう子供こどもの如く泣き崩れしめたのであります。「手足をも切り、命をも捨て、後生は助かると仰せらるゝかと思ひしに、唯だ念佛すれば助かるぞと安々仰せらるゝ嬉しさに、泣けて／＼仕方がござらぬ」云々。

實にや信仰の世界は、法悦の境、無心の極、嬰兒の心であります。感恩感謝の外何物もないのであります。そこには教理なく、流派なく、佛教、キリストの差別もありません。萬法一如です。さながら顔は一人／＼違つてゐても、至誠は一つ、眞情は萬人共通なるが如くであります。吾人の求むるものは此信仰の世界であつて、神學や、教義ではないのです。然るに兎角宗教家は內的より外的に、信仰の世界より宗派の世界に重きを置いて互に論議し、排斥せんとします。理想的

教會合同の出來ないのも其根源は結局そこにあります。

三

十八世に於ける英國の精神界は極度に墮落し、腐敗してゐました。當時上流社會に於ては宗教を語れば人から笑はれ、擧げられたのであります。教會は信仰の火を失ひ、牧師の多くは講壇で只冷たい倫理を説くのみでした。著名な政治家にして信仰を有すもの殆んどなく、首相グラフトン公爵の如き、何時も妾を携へて劇場に臨んだと云はれた位で、純潔や、貞操など時代後れと退けられてゐたのであります。

此時に當つてウエスレー一派の信仰復興運動は起つて來ました。さながら燎原の火の如く英國の上下を燃し、果ては歐洲列國、世界の隅々迄移つて來たのであります。間もなく反感は起り、迫害の火の手は擧つて來たが、それに依つて却て力を増し、迫害すればする程熱心は加つて來ました。特にポイトフィールドの熱烈な説教は、到る所大感動を興へ、彼のプリストル附近の坑夫らに爲せし露天説教の如き思ふだに涙ぐましい光景を呈したのであります。

彼一度立つて説教し出すや、坑夫らは先きを争つて集り、身動きもせず、恍惚として其聲に耳

を傾けました。やがて眞ッ黒くなつた双頬に涙が傳ふて白い溝を造り、あちにもこちにも嗚咽と呻き聲が聞え出したと云ふのであります。

六

四

第一回世界戦争の後、其結果として神秘的傾向は起り、死者の爲の祈や、交霊術や、死後の生活に關する諸問題が著るしく世人の興味を惹くに到つた事は今猶吾人の記憶に新たなる所であり、今回の世界戦争は、二十年前のそれに比して一層慘憺たるものだが、果して如何なる結果を生ずるであらうか。神は決して無益に人の血を流し玉ひません。必ずや靈的方面にも偉大な功果を持ち來たす事は疑はれないのであります。

元來人類の理想は歸一であり、和合であります。人種的競争も、宗派的分裂も遂に打つて溶けて一團と成る事です。白人と黄色人との競争も、佛教とキリスト教との軋轢も畢竟そこに達せん爲の道程に過ぎないのであります。若しそれ無名の一元が或は印度には冥想的佛教として自現し支那には實踐的儒教として、イスラエルにはイエスの靈的啓示の宗教として、更に日本には萬世一系、八紘一字の國體神道として現はれたものと解せんか從來の如き醜い宗派争ひや、異端征伐

は消滅するだらうと思はれます。

かく云はゞとて私は決して彼の歸一協會や、宇宙神教などに賛成するものではありません。信仰の世界は政治や、經濟と異り、飽く迄個性的、特殊的です。個性の深い要求から來ます。従つて個性を無視し、個性の無上要求から出ない宗教は氣の抜けたビール同様、何らの力も、感化もないのであります。一切の個性と、特殊を滅却した一般的宗教と云ふが如きは單に架空の構想たるに過ぎないのであります。

個と全體、特殊と普遍とをどうして調和し、歸一さすかと云ふ事は至難の問題だが、一度信仰の世界に歸るや頗ぶる容易に解決されます。例へば十人十色で、其顔や、個性は銘々異つてゐても、家族團圓のうちの一つと化り得られる如く、信仰や意見は皆違つてゐても靈に於て一致し、愛に依りて全然一つと成り得るからであります。個性を曲げたり、撓めたりする必要はありません。個性は其儘であり、否寧ろ強く主張しつつも家族として一致し、兄弟として結合される所に人生の妙味があります。

私はクリスチャンとして、熱心なる福音主義者として何人にも譲らず、妥協しません。聖書を神の天啓と信じ、キリスト信仰を以て絶對としてゐます。神道者や、佛教徒が何を云はうと、教

七

會内に反對や、異論があらうとビクともするものではありません。私は死を以て之を同胞に傳へんとしてゐます。迫害は寧ろ歡迎する所でありませぬ。

が併し私は隨神の道を尊び、釋尊の人格に敬服します。孔子やソクラテスに依りて教へられ、法然や、日蓮の信仰的態度に共鳴します。それは妥協でも、無主義でもありません。信仰の世界に於て共通のものを感ずるからであります。彼らと人生觀を異にし、教義や、儀式を同うしないと云ふ事が、彼らの人格や、信念や、献身的行爲迄無視し、反對する理由とは成らないのです。同情同感する所があります。妥協せずして提携し、個性を生かしつゝ萬人と親しくし得る秘訣が存してゐます。若しそれ今回の世界的大動亂が全人類をしてかゝる寛裕の態度に到らしめんか、幾百億の財も、幾千萬の生命も決して惜くはないのであります。

私は縦ひ如何なる迫害に遇へばとて私の個性を曲げたり、無上の要求を放棄する事は出来ません。私が私として存在する限り、私の個性的宗教、無上要求より成る信仰を棄てる事は出来ないのであります。従つて私は此意味で孤立であり、淋びしくあります。併しながら一度信仰の世界を見渡すや、天下到る所に我が友あり、共鳴者があつてヨシや身は東京諏訪の一角に栖んでゐても、心は不斷に内外幾多の人々と交際し、親しくし得るのだから又何とも云へぬ賑かさであります。

ます。

私の窮極目的はキリスト教の傳播でも、教會の擴張でもありません。キリストに依れる信仰の世界を弘めん事です。自分の教派や、教會を造り、それを安逸の巢としようなど思つてはゐません。何れの教會、何れの家庭にも信仰の世界を携へ行きて喜びを偕にしたのであります。冷えたるを温め、衰へたるを起し、こんな超越世界を知らずして徒らに悲觀し、墮落しつゝある人々を救ひたいとの念願の外何物もありません。

人種的偏見、宗派的軋轢、我が佛尊しで、自らを優秀人種として他を劣等視し、自分等の信仰を絶對として他を非難し、排斥する所に争ひは絶えませぬ。自信は宜しい。併し他を蔑視してはならぬ。「謙遜をもて互に人を己に勝れりと爲よ」であります。白人が若し東洋人を劣等視せず、宣教師達が異教の長所をも認めて敬意を表し、侵略的不遜の態度を取らず、愛と謙遜を以て、信仰の世界のみ廣めてゐたならば、決して今日の如き困難や、行詰りは生じなかつた事でせう。慨すべきであります。

國民靈化運動は人種や、教派の差別に拘泥しません。一視同仁です。何れの國民にも之を叫びます。何れの宗教の人々にも之を説きます。問題は教義や、儀式ではなく、信仰です。信仰の世

界を宣傳し、擴張する事の外何物もないのであります。其結果として集會も殖へ、會堂も新築されませうが、それは目的ではありません。一生草薙で説法すらも可なり、大伽藍が出来るも可なりです。只眞理を説き、信仰を起せばそれで良いのであります。

信仰の絶對性

信仰の世界は無限で、絶對であります。従つてそこに達せんとする信仰も又絶對であらねばなりません。思想や、感情は海の浪の如く變りますが、信仰丈は海底の巖の如く萬古不動です。然ればこそ人世は信仰が何より肝要で、生命に代へて獲なければ成らぬのは信仰です。一度之を把握せんか最早一切の不安も、恐怖も無くなつて了ふからであります。

何故信仰の世界は萬古不動であつて、信仰は絶對かと云ふにそれは「人よりに非ず、神よりにて、天來の啓示であり、神の自現だからであります。比較的靜かな學界でも、學説は日進月歩です。況んや政界をや、國策だの、百年の大計だの云つても世界情勢の變化とともに變つて來ます。宗

教界又然り、教變も移り、傳道策も改つて來るが、信仰の世界のみ不變であつて、信仰其物は永久微動だもしないのであります。

信仰とは所謂絶對他者なる人格的神が、豫言者や、使徒や、特に主イエスを通して語り出でた御言を信じ、之を彼の義しき意志、絶對恩寵として受取り、聽き従ひ、全く彼に自己を空渡して委ねる事であります。己に依つてなく、彼によつて、彼に於て、彼の爲に生きん事を願ひ又決意する事に外なりません。神は私共に向つて心の戸を開き、我と我が言を受けよと要求されつゝあります。その呼び掛けに應じて立上り、自己を無にして彼に服従し、委ねる事を抜きにして信仰は考えられないのであります。

無限者、全能者が、造られた有限の此世界に侵入し來たのが化身であつて、超越の世界から恵みの音信を携へ來たり、親しく我らに告げ給ふたのが啓示であります。ナザレのイエス、キリストは神の化身であり、自現であつて、亡ぶべき人類に罪の赦と、救ひの恩寵を齎し來つた神の使者であり、其獨子であります。キリスト教的信仰の根底は、此事實を無條件に受入れ、方向轉換をなし、自己や、罪に死んで、神に生き、義に生きん事に外ならぬのであります。

神が既にナザレのイエスによつて自現し、恵みの言を我らに與へ給ふたとすれば、其信仰は絶對で、疑ひを挟むべき餘地はないのであります。其前には理智は頭を垂れ、常識も口を噤まねばなりません。従つて普通一般の學問で、イエスの神たる事や、奇蹟を彼是批判したり、肉體の復活や、キリストの再臨など常識で反對する事程見當違ひはないのであります。

常識は人間の狭い、浅い經驗から得た智識ですから、それを以て高遠な世界の事を判断しようとする、事實は全く顛倒して了ひます。丁度汽車に乗つて、窓外の山や、家がみんな飛んでゐる如く視えると同様です。太陽や、月が毎日東から出て西に入ると思ふは常識で、學問はそれと正反對な事を教へてゐます。

學問は又人間の限りある理性で考へ出したものですから、其窮むる所も有限世界の事で、限りなき絶對界や、超越世界の事迄彼是論議する資格はないのであります。それは丁度小犬が、主人なる哲學者の考えを了解し得ないと同様であります。ニュートンも曾て自分を演邊で貝を拾ふ子供に比しましたが、フランス著名の大科學者アラゴ氏も一貴女より多くの難問を掛けられた時

「夫人よ、予は之を知らず」と靜かに答えたさうです。況んや靈界無限の事をやであります。

信する信じないは其人々の自由だが、常識や、學問で之を批難し、論駁しようなど思ふは全然間違つてゐます。常識的には、奇怪と見え、學問的に不合理と思はれる事も、眞理はどこ迄も眞理です。信するものは之によつて生き、信ぜぬものは亡ぶる丈であります。絶對の信仰に入るには嬰兒の心を要します。謙虚でなくてはならぬ。セシル曰く「智識を得るの第一歩は自身の無智を知る事だ」と、靈界、永遠界の智識に於て特に然りであります。

自己の無智を悟らず、區々たる學問や、常識を頼んで聖書の奇蹟を彼是云ふてゐる人々に、徹底の信仰は到底受取れないでせう。が併し彼らが一度夕暮れ富士の絶頂に立つた時、若しくは愛する者の臨終の床に臨んだ時、人間の如何に小さく弱きを感じ、天地の悠久と、人間の生命の果敢なさを思ふや、學問も常識も及ばぬ世界あるを感じる事せう。そこから宗教は始まります。信仰の世界が幽かに現はれて來るのであります。

三

キリスト教信仰とは、結局キリスト信仰です。換言すればキリスト信用であります。彼の人

格と其言を無條件に信用して疑はぬ事であります。世界は顛倒し、思想は如何に變化しても彼のみ獨り變りません。其人格は絕對にして、其言は萬古不動であります。神とは畢竟彼の人格を無限に延長せる、人間の理智も、想像も及ばぬ存在であつて、眞理特に靈界のそれは、彼の言のうちには横はる無限の條理に外ならぬのであります。私共は閃めく一光線によりて天上無限の光明界を知り、一杯の海水を通して茫洋たる無邊の大海をしのぶ如く、血肉を具へ、親しく人間界に入れる彼によりて、我らの思慮の所詮及ばざる神や、眞理を臚るに悟り、信仰し得るのであります。

氷の冷たく、火の熱きは研究して後知るものではありません。先づ觸れて知ります。研究は後からです。之が藥草か、毒草かと云ふ事も又同様で、研究より先づ嘗める事です。キリストの神性や、其言の眞理たる事も又然りです。知つて信するのではなく、信じて知るのです。彼を信じ、彼に近き、彼を愛する事によりて分つて來るのであります。神學は後からです。判つたら信じようなど云ふ人々は百年経つても信ぜられません。何となれば研究には反對が考えられるからです。反對の考えられる所に絕對の信仰は起り得ないのであります。

哲學は「知識の研究」又は「知識學」などと云はれてゐます。従つてどこ迄行つても涯なく、

絕對の信仰には入り得ません。然るに信仰は何ら人生の經驗なき青年者でも、眼に一丁字なき老婆でも容易く入り得るのであります。死後の生活に就いては、孔子も「生を知らず焉んぞ死を知らん」と云ひ、ソクラテスは將に毒を仰がんとして「若し未來世あらば」云々と假定的に、頗ぶる漠然と語つてゐるに過ぎませんが、キリスト信仰の一少年、一老婦も、輝くかたを望みつゝ喜び勇んで逝きます。彼らに何らの疑ひも、恐れもありません。火の中、水の中でも飛び込むのは、其未來信仰が徹底してゐるからであります。

約五十年前、私も一時神を失ひ、キリストを疑ひ、所謂「神なく望みなき」悲觀のドン底迄衝き落されましたが、一年餘り松江の奥谷で、祈禱冥想し、いよく智識に斷念して、嬰兒の信仰に復つて來たのであります。只もう無心に成つて聖書を拜讀し、祈禱し、愛を實行する事によつてキリストを悟り、歡喜は全心に溢れ出したのであります。それ以來感情に冷熱もあり、思想に進歩はありましたが、信仰は變りません。特に二十五年前大阪に於て活キリストを體驗してから、私の信仰は確められ、高められる一方でした。之を想ふと衷心感謝に堪えないのであります。

四

斯く云はゞ眞理と迷信とをどうして區別するかの疑問も出ませう。子供や、年寄りや、無學な一般人は疑ふ丈の頭がないからだ、苟くも多少考へあるものはさう行かない。疑へる丈け疑うて、いよ／＼信ぜずにおられなくなつてから始めて信すべきだとは尤です。自分もそんなコースを取つて來ました。従つて決して迷信や、妄信を勧めはしません。が併し長い荆棘の路を曲り／＼つて行着いた所はヤツぱり嬰兒の信仰でした。無學者のそれと異らぬものであつたのです。結局疑ふた事は何ら益なく、始めから其儘信じた人々の方が賢かつたと云へるのであります。

眞理と迷信の區別は明白です。眞理は私共の本性と調和するから理屈は分らぬにしても、之を信すれば、全性全靈が應諾し、歡喜に溢れます。併しながら迷信は本性と調和せず、如何にも尤らしく、蠱惑的であつても結局不快と、暗黒に終つて了ふのであります。渴きに對する水、飢に對する食は本性と調和する。従つて之を取れば快感と、満足を感じます。然るに渴いた時、美食を興へられ、飢へた時美服を着せられても本性の要求と調和せず、不快で、不満足であります。されば眞理と、迷信の別は明白で、一見紛はしくても、其結果は、截然、疑ふ餘地はないのであります。

ます。

内に火を點せば部屋は明るく、窓外遙か遠方まで輝きます。一度心に眞理を悟るや、力と、愛と、喜びが充ちて、其面に、言に、態度に反射せずにはおけません。迷信は反對で、力があつても肉的で、喜んで野卑であり、其愛も亦動物的たるを免れないのです。が併し眞理の結果は靜かで、深く且永久的です。「眞理は其効果の確固たると同時に、其働きは靜かにして遅きものなり」とは確に明言であります。

眞理の黄金の粒は其量にこそ相違はあれ、何れの宗教にも散在してゐます。全然眞理を缺如せる宗教があつたら、何人も決して引付けられないでせう。佛教、儒教は勿論、黒住教にも、天理教にも確かに眞理があります。其信徒達は之に依つて喜び、又其生活にも多少變化が起つて來るのであります。要は眞理と、迷信とどちらが多く、又力強く働いてゐるかどうかと云ふ事に歸します。従つて宗教撰擇の要は、抽象的な比較研究ではなく、「木は其果により知るべし」で、個人や、國家に如何なる効果を齎し得たかと云ふ事に依る外ないのであります。

五

過般來教會合同の運動に従事し、甲論乙駁互に争ひましたが、私共の合同論は、教派的差別の撤廢であり、愛に依れる一致であつて全然個性を滅却した、普遍的宗教を主張するものではありません。力ある信仰は個性的です。個性の直接な要求から來ます。然るに一切の個性を抹殺して、何れにも應用の出來得る信仰、萬人向きの廣い宗教を造り出すと云ふ事であれば私共は賛同しません。かくの如きは全然宗教を無力化し、撲滅する所以だからであります。

哲學が其主唱者の個性的要求に依つて或は獨逸流の主智論に傾き、或は英國流の經驗論に成るやうに、同じキリスト教信仰でも、其人々の個性の相違から或はカルビニストと成り、或はホーリネスマンと成ります。彼は彼の如く、我は我の如くです。個性の要求は神聖で、強くあります。互に尊敬し、互譲しつゝ決して争ふべきではないのであります。一木一草、何れも其特性を具へ、決して他と混同しません。併しながら互に衝突せず、千種萬様の花木が一つの林となり、一つの立派な花園を造つてゐるのであります。

私の信仰は無論私自身の知的思考の結果ではありません。聖書を土臺とし、パウロや、使徒達の信仰に助けられ、勵まされつゝ、私の個性的要求から活キリストの信仰を體驗し、彼への莊嚴な感激と、無限の渴仰から自然に生み出された個性的宗教に外ならぬのであります。従つて誰が

何と云つても之を棄て、他に移る事は出來ません。生命に代へて之を主張し、宣傳せずにはゐられないのであります。

私に取りましてはキリスト抜き神はなく、復活現在の彼の外信仰の對象はあり得ません。従つて私の信仰は狭くあります。誰とでも提携は出來ません。同じ個性の要求を持てる人々を尋ねて之と語り、之と信じて驕ぶ丈けであります。昔より一切の力ある宗教は何れも個性的、獨創的でした。其宗祖の個人的本能や、氣質を背景としてゐます。小さいながら靈化の信仰も私の個性や、個人的體驗より出たものであつて、多數決で定めたやうな廣いものではないのであります。私としては私のキリスト信仰は絶對であります。之以上の宗教はなく、之れ以外に信仰はあり得ないのであります。彼を信すれば信する程私は力を得、歡喜に溢れて來ます。彼を思ひ、彼を仰ぐ時私の全心全靈は躍動します。燃え出します。ヨシンば彼に騙されても私は彼の外信賴すべき何物もないのであります。私は無條件に彼の人格と、其言を信じてゐます。それが爲若し地獄に落されても私は満足です。私は狂信者と云はれ、迷信家と罵られる事を厭ひません。何となれば私は此信仰によりてのみ生き且働き得るからであります。

奇蹟的信仰

一

キリスト教は徹頭徹尾、奇蹟の宗教で、奇蹟を除外しては考えられない啓示の宗教です。言を通して御自身を現はされたのが聖書の御言であつて、事實によりて自現されたのが仍ち奇蹟であります。奇蹟は神の直接行動であつて辯護や、釋明を要しません。私共は莊嚴の感激を以て其前に伏し、小供の如く駭き且信するのみであります。

「奇蹟の故に宗教を疑ふ今の時代は過ぎて、奇蹟の故に宗教を信じた昔の時代が再び歸るであら」との柳宗悦氏の意見に私は共鳴します。今の時代は變り易い學說や、科學を最上の權威として信仰の世界、絶對の世界を批判し、疑ふのだが、昔の時代は無心の子供心で之を信じました。宗教が主で、學問は従でした。今日はそれが轉倒し、宗教は世俗的學問に押され、受身と成り、如何にもして彼らと妥協し、調和せんと計り力めてゐるのであります。

キリスト教が若し眞に啓示の宗教であれば、御言と奇蹟とは離すべからざる双關的事實として現はさるべきです。神の本體は思想であります。暖い愛の思想です。何らかの方法を通してそれら

を人間に現はさすにゐられないのが神の本體であります。彼は御靈を以て使徒や、預言者に叫び、其獨子イエス、キリストに於て力強く、生々之を人類に示し給ふたのであります。

淺薄な相對界、人間界から獲た常識や、理智を以て、一躍絶對界、信仰界に入り、神の胸中の秘密まで彼是論議せんとするが如きは僭越の行爲であつて、分を忘れてゐます。現代人は所謂「聖なるもの」を「魅するもの」「不思議なるもの」「莊嚴なるもの」を無視し、驚異もなく、憧憬もなく、平氣で神を論じ、聖業を批評し、さながら自分が神の審判者でもあるかの如く振舞ひつゝあるは片腹痛い事であります。

常識や、理智の世界のみ頼み、信仰の世界を空漠として擯けつゝある現代人の如く、不安や、恐怖や、煩悶のうちに嘆き惑ふものがどこにあるでせう。文化を誇りつゝ心は廢墟の如く、機關の運轉は自在にして、内なる精神は油盡き、錆が出つゝあります。信仰の世界を恢復せずんば此上如何に智識を増し、富みを加ふるも人間は決して幸福には成り得ないでせう。

二

云ふ迄もなくキリスト教はキリストです。而して其キリストは奇蹟其物であり、其生涯は奇蹟

の連続でした。誕生も、死も奇蹟であり、三年の生涯は病を醫し、死者を甦らす肉體的奇蹟、悪鬼を追出し、狂者を慥なる心に返へす精神的奇蹟、更にパンを殖し、水を酒に代へ、風を静め海を渡るが如き自然的奇蹟等で一杯です。奇蹟を否定する事は結局キリストを否定し、抹殺する事となつて了ふのであります。

奇蹟の解釋に自然的と、比喩的とありますが結局は二者何れも奇蹟の事實を否定せんするのであります。パンが殖へたのではない。各自が隠し持つたる辨當を出合せて満腹したのである。水上を歩んだのではない、未明に水打際を歩んだのだが、弟子が水上と誤認したのでと云ふが如きは自然的説明で、風が静つたのではない、心の波が静まつたのだ。海を渡つたのではない。信仰によりて荒れ狂ふ人生の海も安らかに渡り得るとの喩だと云ふのが比喩的説明であります。

奇蹟に反對する人々は、自然界は整然たる神の決定的存在であつて、何物も勝手にそれを變える事は出来ない。従つて奇蹟は自然への違反である。苟くも自然法が嚴重に支配してゐる以上、死者を甦らせ、海を渉るが如き事の起る筈はないと云ふのであります。併しながら其自然法なるものも、畢竟神の意志の現れであつて、神を離れて獨立に働いてゐるのではありません。従つて神は必要に應じて、時に超自然法に依り、自然法以上の御業を成し玉ふ事も出来る筈です。區々

たる自然法を以て、神の自由活動を束縛し得る如く想ふは間違つてゐます。

自然界は靜的に見れば、さながら盲目の器械の如く凡が法則に縛られてゐるのですが、他面より動的に之を看れば、それは自由な活々とした生命の世界であります。大小何れも生きて働いてゐます。奇蹟です、驚異です。何所にも神の手が現はれてゐます。分析も何も出来ません。只もう一駭き信する外ないのであります。自然の世界が直ちに信仰の世界です。一羽の小鳥、一枝の花、何れも神の榮光を現はしつゝあります。彼らは神を離れて働くにあらず、神の意志のまゝ無意識に働いてゐるのであります。

或人々は自然律とか、自然法とか云へば、直ぐそれが自由に働くやうに考へてゐるけれども、法は獨りで自ら執行する事は出来ません。生きた執行官を要します。之なくんば法は死物です。自然の理法は其裏面に一の大意志があつて之を動かしつゝありと信じてこそ初めて意義をなすのであります。然るに輕卒にも神を否定しつゝ自然法とか、自然律とか云ふに至つては愚の至りであります。奇蹟とは此大意志が或目的の爲自由に發動し給ふ事だから、自然法を中止するのでも、破るのでもありません。自然のまゝであれば、當然倒るべきもの、死ぬべきものを、神の意志が其上に強く働き出す事に依りて難病が醫されたり、死者が墓より起き出づるのであります。

我らが日々経験する出来事にも、それが果して自然か、奇蹟か判断し兼ねるやうな事も少くありません。實際活潑なる信仰と、強い意志を以て病者に接するや、或は力ある一言に依り、或は手を其患部に觸るゝ事に依りて、肉體の組織上に變化を來たし、甚しきは其解體(死)をさへ止め、又は其全快の歩を速むる事も少くないのであります。況んやキリストをやです。生命と力に充てる彼の一言は死者を呼醒まし、其手を觸れ玉ふや、さながら靈界よりエレキがいで來たるが如く、不治の萬病を即座に癒したのであります。

或博士が乳部に無害な、慢性の瘤を有する一人に向ひ、非常な權威を以て、此瘤は一ヶ月で完全に治ると斷言した時、果して一ヶ月後には痕跡なきに到つたさうです。若し反對に之は致命傷で、治療は全然無効だと云つたら其婦人はキツと死んだに相違ないのであります。強い信念と意志とは、かくの如く健康と病氣に直接大影響を與ふるのであります。

或學者はラザロが墓から甦つたのはイエスの神的意志が、既に臭くなつた彼の肉體に働き、解體を防止し、蘇生せしめたのだと云ひ、更に主御自身の復活も他人の生命を回復せしめし大意志

に依り、其欲し玉ふ時に於て亦御自身の生命をも死より回復せしめ給ふたのだと云ふてゐます。信仰深く、意志の強い人は、無信仰者又は意志の弱い人が當然死ぬべき場合にも、神より來たる靈的生命に依りて、不思議に病にも、死にも打勝つ事が出来るのであります。

「若しイエスを死人の中より甦へらせ給ひし者の御靈なんちらの中に宿り給はゞ……汝らの中に宿りたまふ御靈によりて汝らの死ぬべき體をも活し給はん」(羅八・一一) 此句の意義を捉うべく自分は幾冊かの權威ある註解書を漁りましたが得る所ありませんでした。何れもボンヤリしてゐます。彼らに體驗がないからハツキリ云へないのだと思ひます。

博士シンブソンは實際死より甦へされたやうな偉い體驗を持つた人ですが、彼は大膽に「之は死後の甦りの事ではない、現在の事だ。即ち死ぬべき體も、御靈が宿り給ふ事により、死より甦へされるのだ」と云ふてゐます。之は自分多年の信仰を裏書きし、確めてくれたと思ふて感謝してゐます。御靈の内在と、其強い力に依りて、病も醫され、死者も甦へされるのであります。

大なる宗教は大なる奇蹟を有し、大なる宗教家は又大なる奇蹟を體驗してゐます。其心靈に、

肉體に、事業の上に奇蹟の行はるゝを見て駭き且恐れてゐます。奇蹟なき宗教は淺薄の宗教です。奇蹟なき宗教家も又平凡の宗教家であります。奇蹟が最も直接的なる神の示現であり、體驗であれば、奇蹟こそ宗教の本質であります。信仰の深まるとともに奇蹟的體驗も更に其力を増して來るのであります。

聖書は信仰の書であつて、科學の書ではありません、従つて聖書を讀む鍵は單純なる信仰であつて學問や、理智分析ではないのであります。才子は己れの才を頼んで、學者はその學問を以て聖書を讀むから眞髓に觸れ得ないのです。才智や、學問の有無に係らず、無心な嬰兒の如き心と、憧れを以て讀む者のみ聖靈の感動を受け、神よりの光りに照され其靈的生命を受け得るのであります。

歴史や、理會でなく、信仰の世界から、信仰の眼を以て聖書を讀む時、私共は驚くべき奇蹟や、超世界的御言に無限の魅力を感じ、神祕に打たれずにはゐません。ラザロの甦りの光景の何ぞ莊嚴なる。湖上を歩み給ふ其姿の何ぞ神々しき、其前には常識も、理智も頭を下げ「我が主よ我が神よ」と叫ばずにはゐられないのであります。かしこは學問や、理智の世界ではありません。神の世界です。神の生々と働き給ふ信仰の世界です。信仰なきものに分らう筈なく、眞の信仰の

人のみ之を見、之を拜んで喜ぶのであります。ガを頂くのであります。

奇蹟的信仰は私共を勇敢にします。快活ならしめます。希望的にし、勝利者たらしめずには措きません。彼らに失望なく、行詰りがないのです。神の無盡藏の力を信じ、其不斷の助けを信ずる以上、天災地變、如何なる強敵、如何なる病苦にも恐れませぬ。何となれば彼らは不可能なき神の御手に一切を任せてゐるからです。アワヤと云ふ一刹那、神は必要の助けを以て、危険のうちより救ひ出し給ふと信するからであります。

今回の歐洲大戰に當り、フランスが獨軍に強く迫られた時、此上は神の奇蹟を頼む外ないと云つたが遂に敗れ、英國が又頻りに敗戦しつゝある今日此頃、寺院に祈禱を命じ奇蹟を求めつつあるが其效なきを見て、祈禱や、奇蹟を侮る人々もあります。が併しそれは全然話が違つてゐます。天は自ら助くる者を助く。二十年來大勝の酒に酔うてゐた佛國が敗れたのは寧ろ當然で、敗戦の結果、殆んど亡國状態に陥つてゐた獨逸が今日の大勝利を得るに到つた事こそ奇蹟の奇蹟と云はねば成らるのであります。

奇蹟を以てさながら横着物が寝てゐて寶の落ち來たるを俟つやうに考へ、平生は高慢と怠慢に目を暮しながら敵はぬ時の神頼み、急に悲鳴を擧げて奇蹟的助けを求むる事ほど神を侮辱した事

はないのであります。ヒットラーの如き人傑が出たのも、ナチスの大活動も、駭くべき科學的發明も人業とは思へません。多年世界を我が有顔に占領し擄取してゐた英佛を倒して、こゝに世界新秩序を立てんとする神の御計畫で、一種の奇蹟と云はねば成らぬのであります。

併しながら神は飽く迄義しく、公平です。今後若し獨伊が英佛同様の状態に陥つたら、神は又奇蹟的に第二のヒットラー、第二の大戦争を起して彼らを罰し給ふ事せう。個人でも、家庭でも同様であります。驕るもの久しからず、彼を倒し、之を起すは神の審きであつて、大は世界の變動より、小は個人々の榮辱起伏に到るまで洩らす所はないのであります。

貴族や、富者の子等が實社會に出て落伍するのも、貧乏と、迫害の中に血の出るやうな勉強し努力したものが遂に勝利者と成るのも決して偶然ではありません。前者は地位や、金を恃んで怠り、後者は自分の力と神を頼んで奮闘したからであります。一は頼むに足らぬものを頼んで失敗し、他は何より確な頼むべきものを頼んで成功したのであります。

「イエスによる信仰」、即ち御名を信する事によりて病が癒され、悪鬼が追出され、甚しきは「蛇を握るとも、毒を飲むとも害を受けず」と云ふのも其人々の信仰と、上よりの力とが合致した時起る奇蹟であります。主は何時も「汝の信仰汝を醫せり」と謂はれました。奇蹟は人の信仰に伴ひま

す。而して其信仰とは心身の努力であります。全人格、全精神の活動を意味します。従つて此信仰なく、活動なき所に奇蹟は斷じて行はれるものではないのであります。

救はれたりとの信仰

一、

「それ信仰は望む所を確信し、見ぬ物を眞實とするなり」(ヘブル一・一)とは如何にも能く信仰の本質を云ひ現はしてゐます。換言すれば、信仰とは未だ得ないのに既に得たりと信じ、未だ視ないのに既に視たりと確信する事であります。そこに何らの疑ひも、躊躇もありません。どこ迄も積極的であり、絶對的であります。

私共は既に救はれ、神の子供の人一とされましたけれども、未だ甚だ不完全です。完く潔められておません。神の像其儘の美しい状態とは遠くあります。「愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顯れず、主の現れ玉ふ時、われら之に肖んことを知る。我らその眞の状を見るべければなり」(約一書三・二)で、それは未だ容易に到達されない理想郷です。が併し私共は信仰を

以て遙に之を望みつゝあります。信仰ゆへに既に之を得たりと信じて驕ぶのであります。

私共は神とか、天國とか、陰府とか、地獄とか云つてゐるけれども、それらは何れも見へぬもので疑へば幾らでも疑へます。單なる比喻であり、お伽噺とさへ想はれないでもありません。併しながら信仰は之を眞實とします。見ゆるものより、見へぬ此らのものをモツと近く、モツと確實として或は歡び、或は怖れてゐるのであります。

之に反して信仰なき人々は、過去や、周圍や、眼先の事斗り觀てゐます。従つて希望なく、ビク／＼し、行詰つて了ふのであります。過去を視れば失敗多く、周圍には面白からぬ事が澤山あります。悲觀せざるを得ません。超越の信仰のみが彼らを引立て、明るくし、勇敢ならしむる唯一の秘訣であります。大思想家ヒルチイーが「人類に對して永續的影響を及ぼせる偉人らは、多くは肉眼で見ることのできぬ物を固く信じ得た人々である」と云ふ事は事實であります。

二

クリスチャンとしては、自分は果して救はれたかどうかと云ふ事程、直接的な、緊急な問題はないでせう。それが若し曖昧で、半信半疑であれば、聖書を読み、祈禱し、集會に出ても悦び

や、感謝はないからであります。長の病氣や、イザ臨終と云ふ場合は無論だが、平安無事の時でも、一度信仰に眼醒めんか、どうしても之を解決せずにはゐられなくなつて來ます。

信者でありながら時に自分は果して救はれたかどうかと疑ひ出すのは、第一其教義がハツキリせず、又不完全な自分の行爲を見るからです。従つて多年の信仰生活も、實際的には案外力なく、未信者同様、懼れたり、悶えたりしてゐるのであります。過去の不信仰や、悪行や、主を欺き、兄弟を跌かせた事など想ひ出すと、救はれたなど思ひも寄らず、ユダの如く亡びの子ではないかとさへ怖れ出すのであります。

相當熱心な信者でも、罪の赦や、救の事など全然考へぬ人々もあります。彼らは只神とキリストさへ信じて居れば、そんな事まで詮索する必要がないと思ふてゐるのでせう。結局未だ眞個の信仰には這入つてゐないのであります。之に反して救はれた／＼と驕ぎ立てる人々もあります。多くは感情的で、確乎たる根據なく、何だか嬉しい氣持になつてゐるらしいが、間もなく冷却して了ふのであります。

私共は救に對し、そんな無頓着でなく、又感情的でもなく、モツと強い、深い信仰の上に立たねばなりません。それは云ふ迄もなく聖書の御言です。神の啓示であります。理智も感情も役に

は立ちません。それに就いて主が如何に語り玉ふたかと云ふ事の外ないのであります。若し神が無いとか、有つても無意識で、人間に全然無關心だとすれば素より救などあらう筈なく、ヨシ又人格的愛の神があつて、我らを救はんと求められても、人間が無頓着で、そんな事を全く問題にしないなら、救は無論實現しません。従つて眞の救は神が救ひの神であつて、人間が眞にそれを求むる時にのみ成立するのであります。

神は上より恩寵の手を垂れ給ひ、人間は下より信仰の手を差出して之を握る時、こゝに初めて救ひが實現するのであります。丁度太陽が上より照らし、人間が下より之を受けて明るく、暖まると同様であります。神の本質は恩寵であり、愛であつて、人間さへ眞心と、信頼を以て神に歸するや、そこに神と人とは抱合し、救ひは成就されるのであります。

三

救は絶対の恩寵であり、神の超越的の行爲だから、救ひの爲に何らの修業も。善行も要りません。善行ゆへに救はれると云ふ事なら救ひではない、報酬です。救はさながら日が照り、雨が降るやうに、神の愛の自發的現れであつて、人間は信じて只それを頂くのみであります。善人すら

救はる、況んや悪人をやです。所謂善人や、義人は兎角自分の義を恃んで救はれにくいのだが、悪人は感激すれば直ぐ飛び込みます。「汝らは恩恵により、信仰によりて救はれたり、是おのれに由るにあらず、神の賜物なり」(エペソ二・八)であります。

當然罰せらるべきものが、超世の恩恵に由りて救はれたのです。亡ぼさるべきものが、神の特別の思召しに依り、賜物として救ひを頂戴したのだから誇る所は毛頭ないのであります。悔改めた彼の十字架上の惡漢こそ何よりの好適例です。彼に何の功、何の善行があつたでせう。彼は悔改めて信するや否、即坐に救はれ、主と偕にパラダイスに携へられたのであります。

正直な信者が突然他から「君は救はれましたか」と問はれ、然りと即答し得ないのは何故ぞ、之れ畢竟彼らが、主を親す、己れを見るからであります。缺點だらけの自己を眺めながら、どうして「然り、自分は確かに救はれた」など云へるでせう。過去を想ひ、現在を見る間、百年経つても救ひの確信は得られず、救はれたる如く、救はれぬが如く躊躇し、逡巡して、安心も歡びもないのであります。

「主は我らの父なる神の御意に隨ひ、我らを今の惡しき世より救ひ出さんとて、己が身を我らの罪のために興へたまへり」(加一・四)云々。私共が十字架を仰ぎ、流されし御血に感泣するのは

それが爲であります。赦さるべくもない罪を、己が身を我らに與へて贖ひ給ふたのだから十字架や、聖餐が尊く、其意義が深いのであります。

心の底から悔改めて主を信じさへすれば、何らの功も要らず、善行も求められず、殺人者も、強盗も、淫賣婦も、無頼漢も一人残らず救はれ、バラダイスへ導かれると云ふ十字架の教ほど人心を魅するものではありません。只もう感激の涙です。餘りの嬉しさ、有難さに子供の如く泣かすにはわられないのであります。其感激、其歡喜が火と成り、熱と成つて全身を燃し、再び罪を犯す事が出来なくするのであります。

贖罪信仰は人の道德觀念を鈍くし、責任感を弱める如く云ふ人々は、結局未だ宗教の淺瀬にゐるのであつて、恩寵の大海の深みを經驗しないからの過ちであります。恩寵への感恩感謝は宗教の精髓であつて、あらゆる犠牲的行爲はそこから自然に流れ出づるからであります。善人たらんとして善人と成るのではなく、悪人たるを自覺しつゝ神に歸し、神に投合して、何時しか善化し、靈化されると云ふのが宗教的救ひの本領であります。

四

贖ひの血を信じ、誠心誠意御名を呼ぶ者にして、自分の救を疑ふ理由は斷じてありません。ヨシ多少の悪習慣や、缺點が残つてゐるにもせよ、救は事實です。罪は赦されてゐる。神の子とされました。天國は彼の爲に備へられてあります。餘りに勿體なくて信ぜられぬ程だが救は確かに成就してゐます。今召されても直ぐバラダイスに携へられます。父の御國に住居が設けられてゐる。何と云ふ感謝でせう。

「それ信仰は望む所を確信し、見ぬ物を眞實とするなり」眞に信仰さへあらば此望みは動きません。信仰ゆへに見ぬ世界と、其幸ひを眞實として悦ぶのであります。勇みつゝ進むのであります。過去の罪は消え、死後の不安も取れて、残るは只感謝のみであります。此喜び、此希望の輝く間、どうして人が憎めませう、どうして人を中傷したり、害したりする事が出来るでせう。善行ゆへの救ひではなく、救はれたからの善行であります。

何よりの不幸は救ひの確信なき事です。救はれたか、救はれないかアヤフヤで日を過してゐる人々には、靈的進歩はありません。何時迄経つても同じ所のみ行きつ戻りつしてゐます。自分は眞個に救はれた、神の子とされたのだ、何と云ふ有難い事であらうと、明けても暮れても感謝し、悦んでゐる人々の顔は輝いてゐます。元氣が満ちてゐる。靈も肉も生々として、次第に主の像に化

し行くのであります。

私は過去に罪を犯した。未だ全く罪より脱してゐない。誘惑に負け易く缺點が多い。人の前で救はれたなど告白するは耻かしいと思ふのは謙遜の如くして實は不信仰であります。何故モツと太膽に主を榮め、其血を讃へないのでせう。大赦によりて出獄の恩典に與りながらそれを信ぜず、依然として牢屋に残つてゐる囚人のやうに、何時迄も我が罪／＼と計り云ふて感謝し得ない人々は、眞に主を見上げず、自分のみ見てゐるからであります。

信仰は飽く迄太膽です。積極的です。未だ得ないので得たと信じてゐます。未だ見ないので既に見た如く信じて悦んでゐるのであります。之に反して不信仰は又どこ迄も卑怯です。既に得たものでも得ざる如く疑ひ、既に見てゐながら未だ見ざる如く躊躇し、疑ひ惑ふのであります。従つて神は私共に信仰を要求し給ひます、「信仰なきものは神を悦ばす能はず」であります。

癒されたりとの信仰

人間は靈と體とから成立つてゐる。而してキリストは靈肉双方の救主で、且癒主であります。然るに今日の信者は彼を靈の救主と信じつゝ、肉の方は無關係の如く思ふてゐます。それは明かに不信仰の結果であつて、キリストをさながら片輪の救主としてゐるやうなものであります。が併し私共の要求は靈肉兩方の完き救主であります。

靈を癒し給ふ主が何故肉を癒し給はないでせうが、靈と肉とは紙の裏表です。主が生きて私共の靈をサタンの手より、罪の力より救ひ玉ふといふ事なら、又私共の體を危難の中より、恐るべき毒素より救ひ出し給ふと信する事は當然であります。癒や救を體にのみ限るのが間違つてゐるやうに靈のみの事と思ふのも同じく間違つてゐます。

「イエス、キリストは昨日も今日も、永遠までも變り給ふことなし」(ヘブル一三・八)です。二千年前のガリラヤも、二千年後の今日の東京に於ても變り給はず、依然として信するものを救ひ、醫しつゝあります。彼の能力も、愛も、變りません。時と場所とを超越せる主は今尙依然として私共の前に、後にいまして、力ある御手を延べ給ふのであります。

キリストに變りはないが、變つたものは私共の信仰です。今日の我らは昔の人のやうに單純であります。嬰兒の心なく、何でも彼でも疑つたり、批評計りしてゐます。そんな所に主は決し

て働き給ひません。「彼らの不信仰によりて、そこには多くの能力ある業を爲し給はざりき」(太一三・五八)であります。

が併し我らが一度悔改め、御霊に満たさるゝや、主の手は駭くべく働き給ひます。奇蹟が行はれ出します。四福音書の記事が現代にも又事實となつて現はれる事とせう。「盲人は見、跛者はあゆみ癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、」(太一一・四)云々。信仰もそこまで行かねば成りません。霊の救のみ説いて、體のそれに説き及ばないのは、信仰なく又自分に體驗がないからであります。

二

聖書は到る所我らの神は癒しの神である事を述べ、新約に入つて一層それが強調されてゐます。聖書が若し眞に神の啓示であれば、病の醫が神の御旨たる事は疑へないのであります。従つて御心に適はゞ此病を醫し給へなど祈るべきでありません。醫されるのが御旨であり、當然であります。御旨ならば我を贖ひ玉へとは誰も祈らぬやうに、體の醫も御旨と信じてモツと太膽に、執拗く祈るべきであります。

イザヤは「まことに彼は我らのなやみを負ひ、我らの悲みを擔へり……その打たれし痕によりわれらは癒されたり」(五三・四五)と云ひましたが、マタイは主がその病者を醫し給ふを見て、此句を想ひ出し「かれは自ら我らの疾患をうけ、我らの病を負ふ」と云ひ、ペテロは又「木の上に懸りて、みづから我らの罪を己が身に負ひ給へり……、汝らは彼の傷によりて癒されたり」(ペテロ前書二・二四)と申しました。十字架は主が私共の罪と、其罪の結果たる病とを負ふて苦み玉ふた事を意味してゐます。

マルコは主の最後の遺言として「信する者には此らの徴ともなはん。即ち我が名によりて、惡鬼を逐ひいだし、新しき言をかたり、蛇を握るとも、毒を飲むとも害を受けず、病める者に手をつけなば癒へん」(可一六・一七)と云ひ、ヨハネは又「我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之より大なる業をなすべし」(一四・一二)と記し、ヤコブは「信仰の祈は病める者を救はん、主かれを起し給はん」(五・一五)と申してゐます。

パウロはキリストのため、體は絶えざる迫害と、死の危険のうちにあつて、何時殺されるか分りませんでした。従つて彼は「常にイエスの死を我らの身に負ふ」(哥後四・一〇)と申したのであります。併しながらそれはイエスの生命が彼の身體に現れん爲でした。即ちイエスの生命が死ぬ

べき彼の肉體に現はれ不思議に其死の中より救出されたのであります。

彼がアジャに於て大なる患難に遇ひ「力耐へがたくして生くる望みを失ひ、心のうちに死を期し」(哥後一・九)た時も、彼は己を頼まずして「死人を甦へらせ給ふ神を頼み」遂に救はれたのであります。従つて之は死後復活の事ではなく、現在の體の甦へりを指してゐる事は明白であります。去ればこそ「神はかゝる死より我らを救ひ給へり。又救ひ給はん」(同一〇)と申したのであります。

四〇

三

此信仰と、熱心な祈り、特に兄弟互に心を合せて祈る事に依りて不治の病床より起き上つた例は古今東西枚擧に遑ありません。若しそれ醫師をして呆然たらしめ、現代醫學をして神業とのみ驚かしめた事例を擧ぐれば、癒の信仰が或人々の思ふ如く單なる迷信だと排斥し去る事は出来ないのであります。勿論病は佛教、神道其他の宗教でも治り、クリスチャン、サイエンスや、心理療法でも治りますがそれは何れも近代のものであつて、其淵源は二千年前ナザレのイエスに依りて傳へられ、實行されたものに外ならぬのであります。

誠にイエス其人が神秘の神秘であり、生命であつて、復活の彼が昇天し、今や靈的に我らの食卓にも、病床にも立ち給ふ事を信する時、不思議な力が來ます。彼を通して神のエレキが私共の弱い體、危篤の病人にも加はり、其體を強め、生かすのであります。之はパウロの如き大使徒が幾度か體驗した所であつて、今日の我らにも實驗される所であります。

政治家、教育家更に宗教家として活躍せし故江原素六翁は、二十二歳の時肺患に罹り、四十二歳にして大咯血し、體温四十度以上に登つて咳止まず、水さへ喉を濕すことが出来なくなつた時、教會では多數心を合せて其癒しを求めました。醫師は最う明日一日の生命とさへ斷定したに係らず不思議に醫され、完き健康體と成つて八十一まで活動されたのであります。

生來虚弱であつた博士シンブソンこそ誰より好い癒の適例でせう。彼は十四歳の時、勉強の爲極度の神經衰弱に陥り、二十一歳の時大學卒業とともに都會の大教會牧師と成つたが、心臟病に犯かされ、生死すら氣遣はれる程となり、幾百回となく倒れかけたと自分で證明してゐます。が併し其後イエス猶生きて、働きつゝありとの信仰に徹底するや、不思議に元氣を恢復し、説教に、講演に、著述に、巡回に、以前とは四倍の働きするに到つたのです。時には一日に十七八時間も打通し活動して疲れず、遂に八十の壽を保ち得たのであります。

四一

併しながら聖書の御言や、醫された實例は多いにしても、幾ら信じ、祈つても醫されず、却て悪化したり、遂に死んで逝く人々もあります。そこで疑惑は起り、躊躇し、祈の熱も冷めて了ふ場合も又少くありません。さう成ると病の醫のみならず靈の救にも同じく疑ひが起り、とうとう信仰の土臺が總崩れに成つて了ふ事さへあります。一體そんな事實をどう考へたら好いのかとは度々受くる質問です。

— それに對して私共は只自分の無智を告白する外ありません。靈界は深遠で、神の御業は複雑ですから、人間の浅い智慧で斷定は出來ないからであります。無論私共の不信仰もありませうし、皮肉なサタンの手段もあるでせう。神は又私共に忍耐を學ばしめんとし、或はモツと堅固な信仰に入らしめんとの御心で、ワザと醫を延し給ふ事もあるでせうが、結局分らぬと云ふのが至當であります。

普通なら若木は蟲が付かないで、ズン／＼成長し、赤ん坊は乳が充分で、丸々と太つて行くのが自然であり、結構ですが、凡てが好都合で、何も彼も意の儘に成ると云ふ事は必ずしも幸福で

はありません。弱い人間は直ぐ高慢に成ります。神を無視し、自分丈けが惠まるべきものゝやうに思ひ出します。従つて他への同情なく、病人や、失敗者を侮る氣にさへ成るのであります。

此時に當つて神は彼らを俄然病床に押込め給ひます。健康を誇つてゐた彼らも日夜大熱の下に呻吟してゐます。名醫も、藥石も及ばず、體は日々瘦せ衰ふるのみ、かくて、始めて人間の弱さが分り、野心や、虚榮心も消えて、他への冷淡を心より悔ひ、果ては神を呼び求むるに到るのであります。かく考へ來らば神が或は刑罰として、或は警戒として人間に病を與へ給ふ事の意義が分るのであります。

五

「凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし」(哥一・二四)とは、信仰と祈に就ての勝利の秘訣であります。不信のゆへに聽かるべき祈も度々退けられ、其結果失望と、悲嘆に陥る事は少くありません。祈が聽かれぬのではない、聽かれる迄、又聽かれるやうに祈らぬからです。エリヤの信仰と熱心を要します。數回祈つて聽かれず、それツ切り止めて了ふやうでは所詮祈の聽かれる筈はないのであります。

祈りの時、未だ得ないのに「すでに得たりと信ぜよ」とは無理な註文のやうだが、實はそれが即信仰であります。未だ熱も冷めず、痛みも取れないのに祈り祈つて既に醫されたと信する時、全心歡喜に充たされ、勇氣勃々、希望が輝いて來ます。かくて何時しか不治の病も醫され、死ぬべき體も活かされて來るのであります。

之に反して不信仰は祈りつゝも疑ひ、熱が上つたり、痛みが加つて來ると、モウ神も祈もあつたものではないと思ひ出し、騒ぎ廻り、かくて醫さるべき病も不治に陥り、成就すべき仕事も中途で崩れて了ふのであります。世にも不信仰ほど心を弱くし、體を損ふものはありません。それゆへ私は何時も千度祈つて千度聽かれなくても尙祈り通せと云ふのであります。神と相撲取るのです、得ずんば已ますと闘むのであります。

眞の信仰は主の人格を信するのです。御言を信じて疑はぬ事です。従つて一時的、表面的の事で直ちに主を疑ふやうな心の起る筈はないのであります。表面どんなイケない事が起つて來てもどこ迄も神を信じ、主の約束を信じて行くのです。嬰兒と成り、馬鹿に成つて祈るのです。小さいかしい智慧や、常識を捨てねばなりません。大死一番、仆れても、死んでも斷じて主を疑はぬと云ふ所迄行つて不思議な感動は起り、天も應じ、人も感じかくて「婦よ、汝の信仰は大なり願ひの如く汝に成るべし」との主の御言が實現されるのであります。

潔められたりこの信仰

「おほよそ主に居る者は、罪を犯さず、おほよそ罪を犯す者は未だ主を見ず、主を知らぬなり」(約第一書三・六)「人もし潔からずば、主を見ること能はず」(ヘブル二・一四)「凡て神より生るる者は罪を行はず、神の種その衷に止まるに由る。彼は神より生るる故に罪を犯すこと能はず」(約第一書三・九)等を讀みつゝ自己反省すれば私共は失望せずにはわれられません。

救はれたと云ひつゝ私共は未だ罪を犯してゐます。「凡て神より生るる者は罪を行はず」とあるのに、依然として罪を行ひつゝある我らは、未だ神によつて生れてはゐないでせうか、新生する迄人は皆肉に屬し、潔められてゐません。従つて「主を見ること能はず」で、現在未來、主にまみゆる事が出來ぬとすれば絶望の外ないのであります。

併しながら此らの御言は、入信とともに直ちに皆道徳的に完全に成つて一點罪も、汚れもなきに到る意ではありません。バプテスマに依りて罪を赦され、御靈に依りて潔められたものは、ヨシ缺點や、過失はあつても、故意に、計画的に罪を犯さなく成るとの意味です。道徳的完全と云ふが如きは恐らく何人も地上では達せられない理想の境地だからであります。

然るに多くは之を誤解し、未信者は信者を責むるに缺點や、過失を以てし、正直な信者は又日夜良心に責められ、甚しきは悲觀して「所詮自分のやうなものには救はれず、天國へ行く資格はありません」などと絶望的嘆息を發するのであります。二者何れも間違つてゐます。アダム以來遺傳して來た人間の根本悪がさう容易く滅絶されるものではないからであります。

然らば信者と、未信者、救はれたものと、救はれぬものとの差別がどこにあるかと云ふに、前者は己の罪を認めて神の御前に謙遜し、後者は神を知らず、自分の罪人たるを感ぜぬ事でありませぬ。前者は又如何にもして神の御旨に添はんものと懺悔し、祈り、努力するのに反し、後者は良心に責められつゝも悔改めず、感謝なく、希望なき不幸の日々を送つてゐる事であつて、其結果は遂に天淵の差を來たすのであります。

「汝ら知らぬか、正しからぬ者の神の國を嗣ぐことなきを、自ら欺くな、淫行の者、偶像を拜む者、姦淫をなす者、男娼となる者、男色を行ふ者、盜する者、貪慾の者、酒に酔ふ者、罵る者、奪ふ者などは、みな神の國を嗣ぐ事なき也」(哥前六〇九)云々。此らは何れも肉の行爲で、惡魔から來てゐます。従つて神とは正反對で、悔改めずば所詮地獄に行く外ないのです。私共も皆曾てはかゝる暗黒の生涯を送つてゐたものであります。

「汝等のうち先きには斯の如き者ありしかど、主イエス、キリストの名により、我らの神の御靈によりて、己を洗ひ、かつ潔められ、かつ義とせらるることを得たり」(同上)「善人だとか紳士だとか云つても、キリストに依りて悔改め、潔められる迄、人間は皆汚れてゐます。肉の現り、利己主義であつて、神の國には適せず、不合格のものであります。ヨシンバ表面の行爲に現れぬまでも、心の底には姦淫、貪慾、怒り、詐り、不正直等の根が蔓つてゐます。

が併し私共は不思議に導かれ、水と靈とに依りて罪を赦され、潔められた事は天上の感謝であります。「赦さるゝ身の幸ひは、世にたぐふべきもの」もないのであります。私共、修業や努力に

よりて義とされたものではありません。主の御贖ひの功德であります。斷食や、水垢離によりて潔められたのでもありません。御靈によりて新生命を吹き込まれ、罪を棄て、義を行ふ活力を上より與へられて潔くされたのであります。

義とされるとは、私共が一點罪なきものに成つたとの意ではありません、不義なるものを義と認め、義人扱ひされるやうになつたと云ふ意味であります。潔められたと云ふのも同じ意味で、全然汚れなき清淨潔白のものと成つたと云ふのではなく、汚れたまゝ神が私共を憐み、潔きものゝ如く見做し、聖徒の一人と爲し給ふたと云ふのであります。従つて私共はどこ迄も神と人の前に謙遜すべきであつて、誇る所は毛頭ないのであります。

三

原理は癒の信仰と同一で、未だ依然として熱も出で、患部も痛んでゐるのに、醫されたと思つて喜び、心から感謝するうち、何時しか全癒する如く、性來の缺點や、遺傳の惡質も未だ残つてはゐるが、主の現在を信じ、「我が心なり、潔くなれ」との御聲に勵まされつつ歡び、勇んで働くうち何時しか潔まり、意識的に罪が犯せなく成つて來る事であります。癒も聖めも賜物であつて

信仰のみが之を受取るのであります。

不信仰は之と正反對で、何時迄も自己の汚れや、不潔のみ視て悲觀してゐます。「なんぢの罪は緋の如くなるも雪の如く白くならん」(賽一・一八)との御言を信ぜず、過去の罪や、現在の汚れのみ數へて泣き事ばかり云ふてゐます。そこにサタンは乗じ、罪のバイ菌は遺入つて來て遂にどうする事も出来なくして了ふのであります。

不信者から視れば自愧の如く、信仰高慢の如く思はれませう。「何だ、潔められた」と云ひつゝ罪を犯してゐるではない乎」と非難するのも無理ではありません。醫された」と謂ひつゝやツぱり發熱したり、痛んだりしてゐるのと同様で、不信者には非常識であり、馬鹿／＼しく思はれるのであります。ダガ併し信仰は超越の世界であります。學問や、理智の到底及ばぬ境地だと云ふ事を忘れては成りませぬ。

「我潔ければ汝らも潔くすべし」主が絶對の聖だから、私共も聖とされずしては主を見る事が出来ません。然らばどうして聖化されるかと云ふに、それは神の恩寵であり、超世的御業であつて、人間の力の到底及ばぬ所であります。藻掻けば藻掻く程一層汚れが出て來ます。さながら泥の中に落ちた羊のやうです。上から手を延して引上げらるる親切な牧者を要するのであります。

「其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ、我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん」です。罪の赦しは聖生涯の門口であつて、潔めは其奥殿です。神は先づ我らの罪を赦し、同時に御靈に由り、御言を以て罪を潔め給ふのです。潔めは惡の源を止め、罪の根を掘り返し、焚き盡す事ですから、修養や、努力の及ぶ所ではありません。只神の超越的恩恵に依る外ないのであります。

私共は恩に由り、信仰に依りて罪の赦しと、潔めを得たのですが、入浴して全身の垢を落した後も、過つて手足に泥を附けたりします。それは人間の弱さからです。ウツかり怒つたり、悪口したり、詐つたり、計らず邪淫の念が起つたり、貪慾が萌したりして、我ながら耻かしく「自分は未だ全く潔められてゐない」と思ふ事もあるでせう。

それは丁度大雨は止み、日は照り出したが、又しても急に空模様が変わり、一寸又小雨が降り出すやうなもので、懺悔するや否直ぐ晴れて來ます。私の親しい某夫人は、中々の信仰家で、熱心だが何でもない事で時々人を怒らす癖があります。併しそれに依つて私は彼女の潔めを決して疑ひません。「すでに浴したる者は、足のほか洗ふを要せず、全身潔きなり」であります。

潔めとは動機の根本的革新です。キリスト的性格の誕生です。低い、卑しい自己愛から、聖い

キリスト愛に轉化する事を意味します。魔術的に性癖や、過失まで、一時に全く取去らるる事ではないのであります。無論それらも次第に改められ、聖化されるに相違ありませんが時間を要します。除々に理想的生活へと進み行くのであります。

以上予は「救はれたりとの信仰」「癒されたりとの信仰」「潔められたりとの信仰」に就いて述べて來ました。何れも其原理は同一で、後や、前を見ず、上を仰ぐ事です。自分や他を見ず、主御身を見上ぐる事の外ないのであります。過去や、將來を思へば不安に陥り、自分や、他を見れば悲觀します。上を仰ぎ、主を見上ぐる事に依りてのみ不斷の歡びと感謝が起つて來るのであります。

眞理と迷信とは要するに結果で判断する外ありません。信じて喜ぶのと、疑ふて悲觀するのとは結果に於て天地霄壤の差であります。私共は理窟を棄て、信じて救はれ、醫され、潔められたいのであります。

第一回歐洲大戰後の英國では、國民道德非常に低下し「人を殺す事や、或は殺される事を何とも思はなくなつてしまつた」とウエルスは「世界文化史」の終りに書いておます。今回大戰後の歐洲は一層悲慘であらうと思はれます。豈に晉英佛のみならんやです。勝つた方も、負けた方も

善かれ、悪かれ、國民の精神上に非常な影響が起つて来るに相違ないのであります。

大戰の結果、國民思想は勃興し、全體主義的と成り、小黨分裂は滅じ、隣保相扶くるの美風も起つて来るでせうが他方には悲觀の餘り自殺は流行し、「人を殺す事」を何とも思はなくなつて、強盜や、殺人罪も増加する事であらうと思はれます。生活の困難から神經過敏と化り、或はデカタンの傾向を生じて、飲酒や、淫猥の風も熾んに起つて来るに相違ないのであります。

爰に於てか何より健全なる希望的宗教が大切と成つて來ます。力のない空しい儀式的宗教でなく、さうかと云つて淺薄な感情的、煽動的宗教でもなく、神祕的にして良心的であり、他界的、冥想的にして而かも活動的、希望的なる快活の宗教を要するのであります。之なくんば人心は飢え、疲れ、戰時的興奮の反動として、醫し難い萎微不振の状態に陥る恐れがあるからであります。

健全なる信仰に立ち、信仰によりて生き、信仰に由りて歩みつつある個人又は國家は、如何なる時にも有頂天にならぬやうに、又失望もしません。何時も平靜で、而かも底力に充ちてゐます。「なんぢら立かへりて靜かにせば救を得、平穩にして依頼まば力を得べし」であります。之に反して信仰なき個人又は國家は、神を畏れず、人を人ともせず、物質や勢力のみ恃んでゐ

るから少し都合が悪くなると直ぐ行詰つて了ひます。堅固なる據り所がないからです。一度不治の病に罹るか、事業が失敗するか、子供が墮落したり、世間の非難抗撃などに遇うや、今までの元氣にも係らず、スツカリ悄氣込んで了つて、それツ切り倒れて了ふ人も少くないのであります。吁信仰なる哉、底力ある信仰こそ個人や、國家を失望悲觀より救ひ出す唯一の秘訣であります。

少年時代の思出 (其二)

明治十七八年頃と云へば、今から約五十二三年の昔です。而かも草深い山陰の片田舎、文明の曙光がヤツと這入つたか這入らぬかと云つたやうな幼稚な未開時代で、今日昭和の御世から考えて見れば所詮想像も附かぬ程一般智識の程度が低く、淺墓で全く隔世の感があります。

父は案外膽太く、心も廣闊した快活な質でしたが、子供に學問さすと家を擲つて他國に飛出してアふとの強い保守的觀念から、小學校が濟むや否私に家の仕事を手傳はせようとしてゐまし

た。所が皮肉にも獨息の私は大の學問好きで、二宮金次郎ではないが、外に出ては田の畦の草の上で、宅に歸つては薄暗いランプの蔭で、叱られながらも執筆し、讀書するのでした。

祖父は家屋と、田地と、家傳の秘藥とを譲つて父を分家させたので、私は半商半農の家を繼ぐべき筈であつたのです。別にそれが嫌と云ふではありませんでしたが、三度の飯より讀書が好きで、とうとう父の意に背き、思ひも懸けぬ方向に轉じた事は、神の攝理と云ひながらどんなに父を失望させ、母を泣せたか知れません。孝ならんとすれば忠ならず、忠ならんとすれば孝ならぬ當時の私の心の切なさを察して頂きたい。私は決して生來の不孝兒ではありませんでした。已むに已まれぬ神の召命に餘儀なくされて、遂に家出したのであります。

三代の秘藥と云ふのは腹藥です。胃腸を整へる妙藥で、故國では相當知られてゐます。其由來は一寸小説的で、父から聞いた事を幽かに辿つて見ると、何時の頃か突然本家に諸國修行の一人の武士が尋ねて來ました。暫く滞在中病氣に罹つたので、祖父母始め一家親切に看護したのです。幾日かの後幸ひ全快した武士は一方ならず喜び、御世話に成つた恩返しだと云うて此秘藥の製法を傳えて往つたと云ふのであります。

雲に聳ゆる太仙の峯を眞中にして、伯耆の國は西と東に別れてゐます。東伯の中心は倉吉で

戸數凡そ三四千、鬱蒼たる城山を繞つた一筋町です。西伯のそれは内海に臨んだ米子町、今では戸數一萬を越へ立派な市に成つてゐます。藥の得意は兩伯に跨り、父は毎年一二を連れて藥袋の入替に出で行くのでした。西伯では米子から境までの濱の目一帯が重な得意先で、二三月月かゝり、歸るのは何時も師走の寒い年の暮でした。

春になると父は商から農に歸つて來ます。忠實な定三が夜晝父を助け、五月の植付、十月の刈入れ時は、母や、私共三人の子供ら迄田圃に總出で働きました。近頃は「土に祈る」とか「土に親む」とか云ひ出しましたが、其頃は未だ土が賤められてゐたから、町の人でも來ると裏耻かしい感じでした。商より農の方が自然で、正直で、確に神に近いのだが、當時の私には無論そんな事は分らず、何とかして一日も早く上京し、勉強したいとのみ思ひ焦れてゐたのであります。

父と私の意見の衝突はそこから起つて來ました。従つて小學校は終えたが前途の方針は全然立ちませんでした。私の切なる遊學熱を止め得ず、其緩和策として、父は暫らく私を濱邊の或漢學塾へ送りました。そこで三四ヶ月勉強したが、先生は時代後れの頑固な老人、生徒の多分は年長者で、私如き少年は殆んどゐません。何か淋びしい、滿らぬ氣がして半歳經つか經たぬ間に家に歸つて來たのであります。

小鴨村は中々の大部落だが、字福守は、僅々二三十戸の小村で、少年時代の友と云つても三四人に過ぎませんでした。武中の益さんは村長の次男で、優しい親みのある子供、西尾の辰さんも又正直無口な少年で、私とは氣が合ひ何時も楽しく遊んでおりました。小林の長は、友達とは云ひながら一ツ二ツ年上で、お負けに家の格が違つてゐたので、一種の嫉妬心から何時も意地悪く私を虐めておりました。

或夏の暑い日、私が小鴨川で泳いでゐると、長が後から追ふて来て、水の中に私の首を沈めました。擧げようとするに又沈めます。澤山水を飲まされ、苦くてく死ぬかと計り藻掻きましました。それ以來、私は成るべく長を避けて、益さんや、辰さんと一層親しくしたのであります。が併し五十餘年を経たる今日、誰も彼もみんな逝つて、私一人が兎も角も未だ地上に残り達者で活動してゐます。何と云ふ感謝でせう。

其頃隣村の醫者の息で、三ツ四ツも年長の友さんと非常に親くし、兄の如く交り色々善からぬ事迄教へられました。無論悪意ではなかつたが、當時の低い道德觀念から私も彼も罪とも、何とも思はなかつたのです。芝居にも連れ出し、茶屋にも上り、欲かぬ酒や、煙草も強ひられ、少年無垢の私に猥褻な事まで教ゆるのでした。世間知らずの私は、何でも彼でも友さんが云ふ通りに

しておりました。

何が大切と云つても特に少年時代には、善い師と、良い友程大切なものはありません。親たるものゝ義務として此二つに注意する事が肝要です。然るに當時の私は善い師なく、又良友もありませんでした。友さんは風采も佳く、溫柔な質で、私を愛して呉れましたけれども無論善い師でも、良友でもなく、無分別にも私を郷里から連出して大阪まで走らしめたのです。それが近邊の評判と成り、父母の心をどれ程痛めたか知れなかつたのであります。

「喜代さん、何時迄も、こんな田舎にゐてはダメだよ。一層僕と大阪に往かないか」

との相談に、私は一も二もなく賛成しました。

「呎、行かう。友さんと一緒なら何所でも往くよ。併し旅費はどうするの？」

「そりア僕が出てやる、心配すな。只コソソリ衣類を着代へ、傘一本持つて出給へ、明日の晩遅く君の家の前で俟つてゐるから、家人に見附けられぬやう注意するんだよ」

「宜しい！」

の一言で出發の話は定まりました。大阪はどの方角にあるのか、海山何百里隔つてゐるか、誰を頼り、何を爲るのかも薩張り分らず、又考えようともせず、友さんが云ふまま家を出ました。胸に

希望の火が燃えて父母の心配も、前途の困難も露思はなかつたのであります。

五八

汽車も、電車もなかつた當時の事として、二人は草鞋懸けでスタ／＼田舎路を歩きました。關金の温泉から、山坂越えて美作に向ひ、落合から川船で悠々岡山に出で、それから小さい汽船に乗つて大阪灣に上陸したのは何日かの後でした。二三日旅舎に泊つて、友さんと私とは暫し別れ、何れも或商店で働く事と成つたのであります。

交通頻繁な北區の目抜き通り、朝から晩まで客の出入りする店で、田舎出の一少年は西も東も分らず、命ぜらるゝ儘庭の掃除や、道具の出入れなどしてゐました。折角大志を抱いて來たは來たが、學校どころか、一枚の本讀む暇もなく、主人も妻君も親切で、可愛がつて呉れましたけれども落付かず、それに國から學校にやる直ぐ歸つて來いとの手紙が矢繼ぎ早に來たので、上阪後二三月で友さん同道歸國する事と成つたのであります。

無斷家出の不届きを父から甚く叱られると思ひの外、隣家の喜平さんをワザ／＼途中迄出迎へさせ、歸つて來ても小言一つ云はず、さながら大阪からの珍客でもあるかの如く、父も母も、家中のものが歓迎して呉れました。大人なら面目次第もない譯だが、そこは未だ十三四の子供の事として一向平氣なもの、夕食後はさも得意らしく大阪談でみんなを駭かすのでした。

我が家を距ること三里、日本海に沿うた蕭條たる由良の町に、一二年前から花王中學館と云ふ私塾が出來てゐました。校長は高官彌學とて曾て埼玉女子師範學校の教諭たりし人、鳥取士族で人品の好い、五十餘りの老紳士でした。どう云ふ譯けでこんな田舎迄流れて來たのか存じませんが、一方質屋業を営みながら他方附近の青年學生を集めてゐたのです。設備も、教授も不完全極つたもので、中學校などと云ふのが耻しい程貧相なものでした。

が併し當時學問に飢えてゐた自分の事だから、入學を許され始めて登校した時の喜びと云つたらありませんでした。本家の龜造君と一緒に、校長の宅の一室に寝起きする事となつたのです。約三年間、雪の朝、雨の夕、傍目振らず勉強し、お粗末ながら普通學を一通り學び得たのであります。私の受けた學校教育は只これ丈です。其後は専ら獨修で傳道しながら或は宣教師に就て、或は所々の英語學校に通ひつゝ學びました。幸か不幸か、神學校の門潜つた事は生れて一度もなかつたのであります。

今こゝ迄書いて來て、朝日の朝刊を手にしますと、大橋外務次官の講演筆記が一寸眼に着きました。曰く「日本の教育は人間を弱體化し、去勢した。私自身十七年間も學校で、滿らぬ事を覺えて來なかつたらモウ少し好い外務次官に成れたかも知れぬ」云々。

五九

豊太郎は勿論、今日のヒツトラーでもムツソリニーでも、何れも学校教育のない連中で、自修の人だ、況んや宗教界に於ける獨創的人物をやです。神學校や、大學を立派に出ても人生の活戰場に立つては必しも勝利者とは限らないからであります。私が少年時代から猛烈な學問熱を抱きながら、種々の事情に妨げられて生涯獨學の已むなきに到つた事にも深い御旨のあつた事です。

過般も或眼科醫が私の左の眼を診察して「随分甚く御使ひになつたものです喃」と申しておました。全く其通りです。六十年來、一日だも殆んど讀書せぬ事なく、晝夜打ツ通しの勉強の結果がこゝに到つたのですから今更駭くには當りません。全く自業自得であります。法然は四十幾歳にして讀書を廢し、其後は専ら念佛修行したと云ふ事だ。その眞似ではありませんが、自分も今後成るべく無益の讀書を廢し、祈と、思索と、傳道に従事したいものと思ふてゐます。

私が始めて郷里の教會を覗いたのは、十七歳の夏の半ばでした。暑中休暇で宅に歸り、晝は廣い座敷でゴロ／＼しながら、夕方獨り市街を散歩し、フト眼に着いたのが其教會でした。教會と云はんより寧ろ傳道所で、男女七八名の小集會でした。何事ならんと怪みながら、格子の外で立聽きしてゐると、上品な七十前後の老婦人が「あなた遠慮なくお這入りなさい」と申して呉れま

した。吁之が私のキリスト信仰への第一歩であつたのです。

倉吉一番の豪家の息で、後法學博士、貴族院議員の一人と成つた熊三君が、未だ高等學校の學生時代、夏休暇に東京から歸つて來て創立したのが此教會です。従つて其親戚友人たる青年らが重に集つて來ました。陰氣な、抹香臭いお寺や、百姓町人が大部分を占めた黒住教などと異り、小數ながら一種清新の氣に充たされ、快活で、生々した所に私の心は強く惹かれたのであります。

私は説教や講演で入信したわけではありません。又傳道師の個人的感化も受けませんでした。私を導いたのは信者の親しい温かい交際でした。十七歳の田舎少年、みすばらしい粗末な綿衣着て兵兒帯一つ締めた私さへいと親切に、全然で兄弟同様に交つて呉れた事が堪らなく嬉しかったのです。人間は智よりも情で動きます。キリスト的愛の交りは、如何なる雄辯宏辭にも優つて力があります。

一時的應援の傳道師は間もなく去り、七八名の信者丈け毎日曜と金曜に集り、代る／＼司會して、聖書を讀み、祈り、讚美するのでした。町役場の書記、藥店の獨息、辯護士の老母、それに私共二三の青年と、娘さんのみでした。人數の少かつた丈け親みは深く、熱く、何れも欣んで

集つて來ました。日曜午後は三々五々手別けして訪問したり、或時は向山の小高い所に登つて、市街を眞下に視下しながら祈るのでした。

信仰の火の燃え上るとともに、迫害も起つて來ました。主は我らを鍛錬し、淨化すべく、悪魔は我らの信仰を打消すべく、家庭や、町民を煽動して迫害させたのであります。両親は勿論、親戚近隣のもの迄擧つて私共に反對し、聖書や、讚美歌を焼き拂ひ、日曜出席を嚴禁するに到つたのです。果ては信仰を棄てるか、家を出る外なきに到つて、私は遂に後者を選んだのであります。今日では山陰も、山陽も、教會は一般に疲弊し、信仰も下火に成つてゐるが、當時は何れの教會も祝され、惠まれてゐました。家を飛出して私は先づ鳥取教會を尋ね、間もなく父が追うて來たので、津山を経て岡山に出で、暫し、流寓の身と成つたのであります。鳥取の兄弟らも頗ぶる親切でしたが、一夜滞在した丈の津山教會では、涙ぐましい計り同情を寄せ、二三の姉妹達は夜通し、私の爲に着物を縫うて呉れました。着の身着の儘で家を出たからです。

岡山教會は安部磯雄さんの全盛時代で、集會は何時一杯でした。石井十次君の孤兒院は未だ創業時代で、或寺院の一部を借り六七十の孤兒を收容してゐました。私は宣教師ベターさんや、丹羽さんの世話で日を過すうち、漸く信仰の自由を得て歸郷したのであります。

其頃父の事業の失敗から、私は退學を餘儀なくされ、花王中學館に暇を告げて家事に従事する事と成りました。いよく獨學自修の外なく、家事を手傳ひながら夜を日に續いて勉強しました。聖人に定師なしと云ふが、聖人ならぬ私にも師はありませんでした。已むなく辭書や、翻譯書など漁りつゝ讀書しました。一家の窮狀を見るに見兼ね、私は取敢えず小學教師の檢定試験を受けたが、幸ひパスしたので、近所の或小學校で二三年教鞭取る身と成つたのであります。

辯護士として、貴族院議員として、一時盛名を天下に轟かした故花井卓三君も、青年時代には尾道在で代用教員してゐたから別に耻かしい譯けではないが、大志を抱きながら田舎の小學校で碌々青春の日を過す事が堪らなく苦しかつたのです。竹馬の友は東京の高商に入り、従兄弟の龜造君は京都の同志社に學んでゐます。どうして愚圖々々してゐられませう。それが強い刺戟となつて此二三年間、私は極度に勉強しました。途行く時も食事中も書を放した事はなかつたのであります。

偶然と云はゞ凡が偶然で、無意味だが、一切が攝理の御手のうちと信する時、平凡な私の過去の生涯にも、一々深い意味のあつた事を思はずにはゐられません。幸福と思はれた熊三君は間もなく信仰を失ひ、龜造君も長い病床で悶々し、二人共早や故人と成つて了ひました。往時夢の如

く墮落したもや、死んだもの多く、今日まで元気で、信仰を持続してゐるものは寥々雨夜の星です。一番不幸で、不仕合せと想はれた自分丈けが兎も角も未だ働いてゐます。

年寒うして松柏の凋むに後るゝを知るとかや。信仰や、人格も又同様です。迫害困難に遇うて始めて堅固なものと成つて來ます。室咲きの梅は直ぐ散ります。逆境にあつて打たれ、鍛えられねば成りません。主は幼年時代より今日まで随分手痛く私を打ち給ひました。神の愛を疑ふ迄に度々試みられたのですが、今と成りては凡が感謝で、幸福と變つて來たのであります。

天を恨みず、人を咎めず、どうして亡き父を怨みませう。知らぬが佛、學問にも、信仰にも極度に反對し、邪魔した父が、却て私をして學問させ、信仰に勵ましたのです。先年アメリカから歸つた時も父懐かしさに墓前で獨り泣きました。「父よ、不孝の罪を赦せ」と。今猶存命なら私はどんなにでもして慰めたいのだが、春風秋雨、去つて早や十五年の昔となりました。此上は只彼の冥福を祈り、かの嬉しい復活の日、父にも母にも遇いたいものとそれ計り思ふて祈つてゐます。(つゞく)

靈化日誌 (昭和十六年)

二月

▲十八日(火)「汝らに聽く者は我に聽くなり、汝らを棄つる者は我を棄つるなり」(路一〇一六)眞の傳道者は斯の如き權威と特權を主より托せられてゐる。どうして自戒自肅せずにあられよう大なる特權を有する者は、又大なる反省と謙遜を要するのである。

昨夜十一時頃疲れて轉寐し、二時頃目醒めた。それより三月發行冊子全部を校正、午前より夕方迄所々訪問した。近頃スツかり信仰を失うてゐる某家庭を訪ひ、予は儼然として警告した「私は何ら此世的要求があつて訪問したのではありません。主の命令で御言を傳ふべく來たのです。従つて之を受くるも拒むも御自由です。あなた方が喜ばれようが御嫌ひにならうが私の關知する所ではない。之を受くるものは救はれ、之を拒むものは亡びるだけです」と云ふや、急に碎け、妻君は遠方迄見送つて呉れた。

▲十九日(水)體の復活を遠い世末の事のみと思ふてはならぬ。御靈の内在により、我らの靈が死の状態より甦る如く、體も同じく復活せずにはゐない。普通なら死ぬべき體も御靈によりて活

きて来る。活氣汪溢死にさへ打勝つのである。

朝黒田姉來訪、肉愛と聖愛に就て語る。間もなく阿部姉久しぶり來訪、未來の事など語りつゝ互に祈つた。雨のしとく降る中を午後、目黒の實家訪問、主人出張で、同夫人に親しく語つた。病後の夫人は心から喜んでゐられた。

▲二十日(木) 神の審きは公平であり、峻儼だ。高ぶる者は倒され、驕る者は打たれる。野心的虚榮的な者は一時の成功にも係らず、結局耻ぢと失敗を招く外ないのである。

午後婦人會で、神の攝理を説いた。眞に御旨に服従する以上、何事も恐るゝに足らぬ云々。

▲二十一日(金) 「イエス、ガリラヤの諸會堂を巡りて福音を傳へ玉ふ」「かくて村々を歴巡りて教へ給ふ」云々。我らも又小さい安逸の巢を過らず、遣さるゝ儘何所にも行きて福音を傳えねばならぬ。が併し托せられたる羊、任ぜられたる教會を擲つて置いて徒らに飛び廻るが如きは無責任であり、不忠實だ。先づ内を固めて外に出で、置かれたる所に主力を盡し、餘力を以て他に行くのでなくてはならぬ。

午後二家庭訪問。親しく語つた。

▲二十二日(土) 「怒る者と交ること勿れ、憤る人とともに行くことなかれ」(箴言) 何となれば

彼らは感情に驅られ、冷靜な判断が出来なくなつてゐるからだ。「義者は七次倒ふるゝともまた起く、されど悪者は災禍によりて亡ぶ」(同上) 然り此自任あればこそ我らは戦へる。「義人惱み多し」だが、不思議な助けが意外の邊より來て、又も引起して呉れるのである。

朝來狂風火事を氣遣うてゐると、一二丁下から火を出し、消防自動車のサイレン消魂しく、町内は大混雜であつた。私は折悪しく散髪中であつたが、事に依つたら何千戸焚き拂はんも知れじと飛び出さんとすれば、早や交通遮斷でどうする事も出来なかつた。が併し流石帝都消防隊の機敏と、活躍は偉い。間もなく完全に消し止めて了つた。

▲二十三日(日) 或米國婦人が曾て余に云ふた事がある。「自分らは一週に一度善い説教聽かされたら満足だ。それ以上牧師に要求はせぬ」と一週一度善い説教する爲には、積日の祈と、思索と、讀書を要する。月に一度も快心の説教は出来るものではないのである。今朝の禮拜説教も、自分は三度草稿を代へた。快心と迄は行かぬにしても兎も角も始めより終迄自由と力を與へられた事は感謝であつた。

朝鮮多年の共鳴者笠利兄出席、力強く信仰の證された。長い間、夫人が熱心祈つてゐられた某主人も、始めて出席、祈の答と喜ばされた。午後余は品川邊訪問、病後の稻垣夫人与主人に語り、

歸途夕暮れ某兄に遇ひ、懇々信仰の事を語つた。

▲二十四日(月) 好天氣、やゝ疲れを覚え、突然池上の本門寺を訪うた。好い保養であつた。パウロと日蓮とは酷似した所がある。法然が天父教なら、日蓮はパウロ教だ。甲は抽象の彌陀を信じ、乙は史的釋迦を信仰の對象としてゐる。パウロがイスラエルの救の爲には、自分は亡びても良いと云ふたやうに、日蓮も祖國日本を佛土となすべく官權と戦ひつゝ獅子吼したのである。

京都上加茂の山莊から寄せられた栗原基兄の親書に曰く。

「靈化冊子第一「福音を携へて南洋へ」及び、其前に送られた「日本的基督教」の終刊共に拜讀、多大の感鳴を興へられました。時難に處しての……重大なる御使命がいよ／＼眞剣に紙上に溢れてゐることを感じました。……風邪の爲南洋靈戦が妙からずハンデキャップをつけられた御様子には痛く御同情申上げました。しかし最後までよくも善戦されしものかなと讚嘆せざるを得ませんでした。使する人も迎へる人々も使徒行傳を如實に味得されて神に感謝されたることは此冊子の生命として永く傳へらるべきものにして、東亞傳道團の一環となるべきことゝ信じます。

「……何時かはキリストの靈訓と生命とが新しく日本から東亞に溢れ出で更に逆に西洋の先進

國に流れ行くことが事實とならないでどう致しませう。併しそこ迄行くには幾年、幾十年又幾百年を要するでせうが、我々は飽く迄謙虚で一切の罪惡から救はれるのが先決問題であつて「大なる者」となることを止めて、進んで足を洗ふ丈の覺悟がほしいものです。今日のやうに自畫自讚に陶醉し、早くも既に東亞の指導者となり得たやうな概念に捉はれ、空漠な幻想に躍つてゐては恐るべき後難が待構へて居りませう……」

栗原兄は學者で、人格者で、其思想は深い。多年京都の山莊に靜居して其名は世間的にパツとしないが、知るものぞ知る。一度其人格に觸るゝや生涯忘れ難いものがある。過般君は其の恩師「ブゼル先生傳」を著し、又新井奥遼先生の「宗教的斷片」を出版せんとしてゐられる。吾人は君の隠れたる奉仕に對し敬意を表せずにはゐられない。

▲二十五日(火) 宗派合同問題から曹洞宗がまた内紛を起したらしい。權勢爭奪を以て狂奔するが如きは宗教家にあるまじき事だ。キリスト教界に於ても兎も角合同が成立した以上、統理者が誰であらうと、任期が何年であらうと騒ぐ程の事ではない。自分は最もそんな細事は他に委ねて置いて直接街頭に叫ぶつもりだ。先づ個人より家庭、家庭より廣く國家社會に及ぼさんとしてゐる。今日こそ文字通り、朝から晩まで飛び廻り、野方から西荻窪迄歴問した。約十名の信者未信者

に膝詰めで道を説いた。

七〇

▲二十六日(水) 眞の宗教家は平和の使者として、靜かに、深く靈的働きに從事すべきである。政治的事務的の事は寧ろ第二第三だ。祈禱の力を信じ、惡靈と戦ひ、地獄を恐れ、御國を慕ひつゝ亡ぶる人々を救ひ出さねば成らるのである。

午後二家族訪問、夕は説教の準備に没頭した。

▲二十七日(木) 水戸は徳川三家の一、日本精神發祥の地だ。數年來一度見たいと思ひながら折を得なかつたが、八九名の兄姉らと今日始めて行き夕方歸つた。流石は舊都、市街も立派で、上品だ。特に弘道館附近や、常盤公園の梅林は實に天下の名勝である。

好文亭は結構瀟洒、古雅に富み、眺望實に飽かぬものがある。光國公隱樓の地だ。今では一般の觀覽に供せられてゐる。

△二十八日(金) 國民靈化運動として予は目下頻りに個人傳道、家庭訪問を力めつゝあるが、其効果は著しい。近頃賀川君の如き大集會主義の人でも「家族傳道、家庭集會に力を注いだら傳道がモツと延びるであらう」と云ひ「今日傳道の門戸は到る所に開かれつゝある、決して失望すべきでない。迷へる羊を熱愛して行けば、必らず勝利を得るであらう。今や大集會主義よりか一人

／＼の個人傳道が必要と思ふ」云々と云ふてゐる。全く同感だ。

が併し問題は方法でない、魂だ。福音的熱心だ。之なくんば徒らに訪問しても益なく、却て人を碍かせよう。我らは先づ大に悔改め、主との交りに徹底し、聖書の眞髓たる活ける主と、其救ひとを携へ行かねばならのである。大集會では言や、聲や、辨舌が大切だが、個人傳道、家庭訪問に必要なのは信仰と人格だ。燃ゆる魂と、純眞の人格である。其説く所は飽く迄聖書的、實驗的で特に今日に於ては他界的、終末的福音をシツかり握つて行かねばならのである。

春雨蕭々、夕の祈禱會は淋しかった。

三 月

▲一日(土) 今日多忙の世の中、一家の主人たる人に逢う事は日曜以外殆んど時がない。毎日訪問しても婦人、子供、病人若しくは年寄りの外接し得られない事は遺憾だ。とは云へ決して失望すべきでない。それらの人々に火を付けて置けば、屹度主人達にも燃え移るであらうから。聖フランシスは小鳥や、狼にさへ説教したではないか、況んや人間をやだ。女子供と侮る勿れ、年寄りや、病人計り相手の傳道は滿らぬなど云ふは異教的で、斷じて福音的態度でない。今日二人の主婦に遇ひ洗禮準備の爲語り且祈つた。

七一

▲二日(日) 今朝の聖餐式に余は先づ暫らく「萬のものを血をもて潔めらる。血を流す事なくば赦さるゝことなし」(ヘブル九・一二)てふ聖句に就いて釋明した。罪は血に値ひする。生命を要求される。全人類を贖ふべく神は其子の寶血を求め給ふたのである。汚れとは氣枯れだ。淫慾、貪慾、怒り等に依りて氣枯れた魂は血に依りて緊張し、目醒める。若しそれ義人や、愛國者の流す血を見んか、何人が氣枯れた心を潔められずにおよう。況んや神の子キリストの寶血をや、暗憺たる最後をやである」云々。

陪餐者多く靈氣堂に溢れた。終つて予は更に赦罪と病の癒に就て語り、主が病者に對し、「汝の病癒さる」と云はず、「汝の罪赦されたり」と云はれし事の意義を説いた。病の根源は罪だ、先づ罪の赦しを受けずして病の完全な癒は得られないからである。雨天に係らず珍らしい好集會であつた。

▲三日(月) 今日ば桃節句、少年時代が想ひ出された。夕吉祥寺の今村兄宅で、有志懇談會が開かれ、余も出席した。牧師五名、帝大教授三名、工博一名、其他陸軍少將、控訴院檢事、神道家等で、頗ぶる振つた有益な會合であつた。文字通りの懇談で、各自不遠慮に所感を述べた。

△四日(火) 「我れ父より出で、世に來れり、又世を離れて父に往かん」(約一六・二八)とは宗

教の極致だ。イエスの外かくも簡明に、卒直に人生の歸趣を述べたものはなからう。夕は青山兄宅集會、寒い夕に係らず、暖い良い集りであつた。病める信州の林兄へ、

「死を征復する事が生きる秘法です。死に對して我らは再檢討せねば成りませぬ。肉の死は區々たる細事です。何よりの大事は内なる人が、靈的生命が、生々と活躍する事です。そこには最早死はないのです。病床にありて病を忘れ、肉體を忘れ、自由なる靈の世界へ飛揚する所に無上の愉快があります……」

▲五日(水) 試験や、裁判の時、祈る事は迷信かと云ふに必ずしもさうでない。無論平生の勉強や、注意が肝要だが、イザとなれば誰でも恐れを生じ、上つて了ふからだ。其時祈つて心を落付ける事が大切である。又靈の告げと云ふ事がある。スツかり忘れてゐた事を祈つてゐるうち不思議に示めされる。

借て試験は立派に出來上つても、甲乙同じやうな成績であつた場合、何れを取り、何れを落すべきかは試験官の考へ一つだ。神に祈るのは無理や、不正ではない。彼が公平に、義しく判斷せん事である。裁判の事も又同じだ。判事の誤りなき判決を祈るのである。人事を盡して天命を俟つと云ふが、只消極的に俟つ計りでなく、モツと積極的に祈り通さねばならぬ。不義なる裁判人の

喻もあるではないか。祈り祈つてそれでも猶聴かれなかつた時、我らは一切を御手に委ねて悶えぬ事だ。きつと後で分つて来よう。それが即ち信仰である。

▲六日(木) 古ユダヤ人の京もうで、我が國民の伊勢參宮、何れも國民的信仰の現れで、歡喜の極みであつた。我が國民は室町時代から一生一度はキツと伊勢詣りせねばならぬ事となつて來た。「春めくや人さま」の伊勢詣り」で、昔は參詣者の首途に際し、親戚故舊は喜んで之を村はづれ迄見送り、又迎ふるのであつた。交通便利の今日では一年の參詣者實に二百萬人を超へてゐると云ふ事だ。祖先想ひの日本人の心は、自ら伊勢に向はずにはゐないのである。

執筆中フト感じ、王子の若狭兄を訪へば二三日前から先生を想ひ出してゐたとて大喜びであつた。思ひは不思議に通ふものである。

△七日(金) 今日も突然上杉姉を訪問、今朝大阪から歸つて來た所だとして喜び、八十九歳の老母や、親戚の娘など一間に呼んで祈を求められた。耳の遠い老人として、予は隣家に聽ゆる様な大聲で祈つたが、能く分つたとて喜ばれ、夫人も「御祈の聲で、昨夜來の疲がスツかり醫された」などと云ふてゐられた。舊知は懐しい。同夫人とは約三十年來の交際だ。

夕の祈禱會惠まる。パウロがアジャで道を傳ふべく聖靈に止められたと云ふが、東京市内に於

ける我らの傳道も、時に聖靈に止められ、又或時は促される。所詮聖靈の導くがまゝ働く外ないのである。「この二人、聖靈に遣されてセルキヤに下り」(使一三・四)云々。

▲八日(土) 昨年十一月より靈化教會々員一通り訪問したから、ボツ／＼市内の信者及び他教會の教師や信者にも及ぼさんとしてゐる。我らは教派や、教會を傳えて行くのではない。信仰の境界だ。従つて教區も、繩張りもない、導かるゝ儘何所へも行ってキリストと其力を傳ふるのである。誤解も出で、反對も起らう。併しそんな事で躊躇すべき時ではないのである。

王子と、下谷の二家族を尋ね、歸途某家庭に立寄り祈つて歸つた。

▲九日(日) 好天氣、高橋兄と予と短く説教した。集會多く、全會活氣に充たされてゐた。午後高橋兄同道、埼玉縣所澤まで行き、二三の兄姉らを訪問して歸つた。

▲十日(月) 今朝早く靈南坂に小崎牧師を、芝榮町に聖公會の松井監督を訪うた。國民靈化運動の主旨を先づ各派の教師達に語らん爲である。それより何所へ往くべきかと街頭に立つて祈つてゐると、大森方面に導かれ、突然靈化の讀者氏家姉を訪問すれば、病後の夫人は「今朝八時頃先生の事を想ふてゐた所です、何と云ふ不思議でせう」とて大喜びであつた。

洗足池畔に竹田家を訪へば、夫婦共心から歡迎、祈りつゝ靈感の溢るゝを覺へた。夫人は遠く

まで送り「老齡の先生が私共の宅までワザ／＼来て祈つて下さるとは何と云ふ感謝でせう」と云ふてゐられた。池畔の梅樹何れも満開、春の氣分が漂うてゐた。

▲十一日(火) 風雨烈しく終日筆を取つた。一睡後醒むれば正に午前三時、次ぎの禮拜説教を準備した。雨はやれ窓を撲つて騒がしかつたけれども、四隣人なく、靈想の頻りに湧くを覺えた。

▲十二日(水) 世界的説教家ゼファソン博士が云うた「近頃政治家型の牧師や、事務的な、計畫の立つ事業家型の牧師又は何々主義運動家に似た型の傳道者はザラにあるが、深味のある眞の説教者が出ない。此種の説教者なくば基督教の將來は危険だ」と。それはアメリカ計りの事ではない。現時の日本にも的中してゐる。

午後神田の駿河臺に文化協會を訪うた。愈同協會入會を許され、今後紙の配給を受け得る事と成つた。

▲十三日(木) 今日市内の某富家を訪はんとして途中想ふた。巨萬の富も、宏壯な邸宅も我に於て何かあらんやだ。予は興へん爲に往きつゝある。一厘半錢だも貰ふ氣はないのだから遠慮も心配もあるべきでない、と、到れば老夫人は初対面ながら涙で喜んでゐられた。若夫人に伴はれつつて某病院に行き、入院中の主人の爲に祈つて歸つた。

▲十四日(金) 單なる感情は變り易く、直ぐイヤに成るが、確信と、意志の上に立つたドツシリした感情は、ヒシ／＼人の肺腑を衝くものがある。一口に感情はダメだと云ふが、それは前者の事で、後者ではない。人間を動かすものは至誠であり、熱涙だ、同じ感情でも良心から、腹の底から出て來るから尊く、力強いのである。

昨夜から打通しの雨の中を澁谷から帝都電車附近の家庭を尋ねた。死後の事を語つて去らんとすれば、今日は丁度亡き長男の命日、ワザ／＼來て頂いたようだとて喜ぶ横山夫人、病牀に按手祈禱して新らしい力を與へられたと心から感謝する今井兄等もあつた。外套はツブ濡れだが、途中畠の中の梅花雪の如く、シト／＼降る中を暫し立つて打ち眺めつつ歸つた。

▲十五日(土) 居は氣を移す。狭い家の中でも、書齋は仕事場で休みにならず、今日は終日下の客間で安靜した。働くものは休む事を知らねばならぬ。が併し自分は何らの娛樂も、遊技も持たない。只花が好きで女中が買つて來た桃の枝を賞し、家内が植えた小さい鉢の紫色の草花など眺めつゝ明日の説教準備するのであつた。

「其口を守る者は其生命を守る、その口唇を大きく開く者には滅亡來たる」愚なる者は其怒を盡く露し、智慧ある者は之を心に藏む(以上箴言)

然り、我らは言が多過ぎる。寡言沈黙でありたい。

▲十六日(日) 長い間の経験で、説教や、祈禱に餘り高聲や大聲を出すと靈感の乏しきを感じてゐたが、過日八十九歳の耳の遠い老人に語るべく高聲を餘義なくされてから、必ずしもさうでない事を思ひ出し、今朝の説教にも終始大聲を發した。疲れを覺えたが休む暇なく、洗禮志願者の爲に祈り、晝食後婦人會で語り、直ぐ本郷の一讀者を訪へば、之又耳の遠い人で、近所に響く大聲で語り且祈つた。全身打たるゝ如く感じ、夕食後其儘横に成つた。

▲十七日(月) ルーズヴェルト大統領は、民主主義が倒れたら一切の「言論及び發表の自由」や「各人各様に神を信する自由」が忽ち禁斷されると云ふてゐるが、外國は知らず、少くとも日本に於ては必ずしも當らない。日本歴史が何よりの證據だ。日本は昔から他教に寛大で、苟くも國體に背かぬ限り、佛教でもキリスト教でも均しく容れて來たのである。

今日の如き時局切迫の時でさへ、我らは信仰の自由を楽しんでゐる。文書に、説教に、聖書の眞髓を傳えて何一つ妨害は受けてゐないのである。若しそれが在米邦人にして大統領の演説に刺撃され、樞軸側が勝つたら今後言論や信仰の自由が全然取消さるゝ如く思はゞ間違ひである。家族全體主義から國家の存立を危くするやうなものは禁斷されようが、吾人の所謂日本的キリスト教は、

獎勵そこされ、禁斷など思ひも寄らぬ。

▲十八日(火) 終日暴風雨。夕は土田兄宅集會。新婦を迎へて楽しいホームと成り一同感謝した。

▲十九日(水) 好天氣、來訪者多く、特に大阪から木下夫人の突然の訪問は嬉しく心から歡び合つた。

▲二十日(木) 主は初對面のナダナエルを評して「視よこれ眞のイスラエル人なり、その衷に虚偽なし」と云はれた。虚偽なき所に人格の基礎がある。人一度信を失はんか、學も、辯も、否涙さへも三文の價値なきに到る。慨すべきである。

大阪の某氏來訪、久しぶり親しく語つた。一時誤解から靈化を遠つてゐたが、十年も経てば誤解は解ける。とけて見れば濟まぬ感じも起つたのか頗ぶる恐縮の體だ。悔ひし碎けし心を何で輕しめよう。過去は一切水に流し、晝食を偕にしつつ信仰談に耽つた。

▲二十一日(金) 春季皇靈祭。近頃稀れな暖かい上天氣であつた。午前十時より獨立同盟會の總會に臨んだ。東北、關西遠くは九州邊がらも代員が集つて來た。が併し滿らぬ形式や、議事に時間の大部分を取られ、肝腎な思想問題、信仰問題、傳道策等に就いては何ら得る所なく遺憾であつた。散會間際の最後の時間に、予は短く左の如く語つた。後で或牧師は「モツとゆつくり聴き

たかつた」など云ふてゐた。

思想險惡なる現時の日本に於て、苟くも相當考ある同胞に傳道せんとすれば、キリスト教對神道其他に就いて確乎たる意見を持たねばならぬ。ウツかりすれば由々敷問題を引き起さんも知れぬからだ。自分は數分間で左の如く述べた。

「老子の言を借りて云へば、無名の一元が宇宙の中心にあつて、それが印度に自現しては冥想的佛教と成り、支那には實踐的道德教として、日本にはかんながらの道として、ユダヤには靈的、天啓の宗教として現はれたのである。大元は一だが、其現はれ方や、程度は違つてゐる。従つて從來の如く互に排斥し、抗撃すべきでない。

キリスト教は天啓の宗教として現はされた。靈の事、救の事に就いては絶對だ。他の何物とも妥協は出来ない。自分は日本的キリスト教を主張しつゝあるが、キリスト教其物は有機體で生けるポデーだから日本化は出来ない。手や足を一本切つて、神道其他と接ぎ合はせようとすれば二つとも片輪に成らう。キリスト教はどこ迄もキリスト教で行かねばならぬ。

宗派神道は別だが、國體神道は日本の生命であつて神の攝理より成り、廣い意味での天啓だ。特に天照大御神以來、統治の神として君臨し給ふ天皇は、神の心を以て、神の現れとして萬世

系以て此國を治め給ふのである。斯くの如きは世界無比で、偶然だとか自然だとか云ひ去る事は出来ない。一羽の小鳥さへ神の攝理の内だと云ふではないか、況んや二千六百年來連綿たる我が國體をや云々。

日本的キリスト教とは、着物や、容器の問題だ。歐米に入つて歐米化せるキリスト教は日本に入りては又日本的に成らねばならぬ。神社や、神職の清淨に慣れた我が國民が、鍔だらけの羽衣袴で説教司式する牧師の許に集る筈がない。華美は退けるが會堂でも、祭服でも清淨にして、威儼あるものでなくてはならぬ。

歐米人は自殺は他殺と同罪として排斥してゐる。而かも其根據は十誠中の「殺す勿れ」の一旬に過ぎない。彼らは神の興へし生命を絶つものとして一切の自殺を罪惡視して來た。が併し東洋意識特に日本意識はそれとは違つてゐる。生命は鴻毛より軽く、義は泰山より重しだ。義を重んじ、節操を守るべく、非常手段として取つた壯烈な自殺迄、單に「腹切り」など、輕蔑する白人の心は低い。彼らは靈の生命より肉の生命を過重してゐるからだ。

死者の爲の祈に就ては予二十年前より主張し、或人々から異端視されたのだが、今となつては反省せねばなるまい。聖書的根據は薄く僅かにベテロ後書三・一六の外ないので、カルビン

の如きは「聖書の何所に死者の爲に祈れとの一言半句でもあるか」と痛論してゐるけれども、余は之に對し「然らば問はん、聖書の何所に死者の爲に祈つて成らぬとの一言半句でもあるか」と。自分は彼に教へらるゝ所少くないが此點には賛成出来ない。

從來歐米の新教神學者らは多くカルビンに同意して來たのだが、日本人たる我らは之を再檢討せねば成らぬ。啓示のない事は、與へられし理性に依つて判斷する外ないからだ。日々白骨の勇士が歸りつゝある。息が戦死しました。先生、どうか彼の爲に祈つて下さい」と云はれてそれは迷信だ、偶像的だと駁斥する勇氣ありや否や……」云々。

▲二十二日(土) 多年臺灣に在つて靈化運動を助けられた若宮ドクトル、今回一家を東京に移したとて來訪された。氏は老境に入つて愈信仰に進まれたらしい。久しぶり心ゆく語り合つた。終日春雨濛々として鬱陶しかつた。

▲二十三日(日) 雨天に係らず禮拜は頗ぶる盛會、活氣横溢、何れも歡喜に充たされてゐた。有力なる求道者が熱心に出席しつゝあるは嬉しい。名古屋第一銀行の竹味兄も學生を伴うて始めて出席された。食事中「あなたはどうか縁故で入信されたか」と問えば「自分は或人の紹介で靈化を読み出し今日に至りました。教會には一度も出た事がありません」と云ふてゐられた。

ゼノアの聖女カタリナが惡魔に向つて「汝は誰ぞ」と尋ねた時、「自分は愛のない者」だと答へたさうである。

▲二十四日(月) 雨漸く晴る。午後訪問、夕は金坂兄に依りて「キング・オブ・キングス」の映寫會を會堂で開いた。晝はもう古いが、感激又感激であつた。約十年前自分は羅府のハリウッドで初めて見たが、も一度見ても感ずる所少くなかつた。イエスに粉したものの、落付いた態度や熱烈な祈は我らの學ばねばならぬ事だと思ふた。

▲二十五日(火) 終日在宅「奇蹟的信仰」の一片を書き畢つた。随分骨であつた。夕は疲れ、ラヂオを聞きつゝ何時しか眠つて了つた。眞の快眠は眞に疲れた時に限る。

大阪市青木庄藏翁から來年は八十歳に成るから大和の故山に移り、悠々林泉に親しむ事と成つたとの通知が來た。「亡父百四歳の天壽を享けし現地にて尙ほ二十年の餘生を恵まれない」云々と愉快な通信である。

▲二十六(水) 宗教界にも無論政治家や事務家はいる。が併しそれらは云はゞ僕婢の役目であつて、王者ではない。信仰や、思想こそ他を支配し、感化する眞の王者だ。然るに兎角王者が僕婢の如く侮られ、僕婢が王者の如く敬はれ易い。冠履顛倒とは此事であらう。視よ、イスラエルの

王として来りし主イエスは僕の如く、罪人の如くされ、野心と貪心たんしんの外なかつたピラトや祭司長らは、民のリーダーの如く王者の如く尊敬されたのである。

今日は鎌倉より鶴沼邊くづぬまの家庭訪問。

▲二十七日(木) 炬燵こたつの火で學ぶ所があつた。炭火を深く埋めて置けば熱くないやうでも、何となく暖かで氣持ちがよいが、表面に丈け火を散じて置くと一寸熱くても何時しか冷へて風を引き易い。信仰上の事も同様だ。ドツシリした人格の根底がないと、一時逆上する程熱くても間もなく冷へて、結果は甚だ悪いのである。祈でも、説教でも所謂丹田から出る聲でないとなんとも通じない。至誠だ、熱情だ、凡は腹から出なければならぬ。

▲二十八日(金) 支那派遣軍總司令官西尾大將も、今度の凱旋がいせんに當り、到る所非常な歓迎を受けた。松岡外相が又獨伊の盟邦で、さながら一國元首にも均しい大歓迎を受けたらしい。ダガ併し軍人や外交官は歓迎も華々しい代り、一朝失脚すれば悲惨あはれなものだ。之に反して眞の宗教家は、歓迎や冷遇の上に超然として迷へる一匹の羊を尋ねてゐる。滿まんらぬ生涯のやうだが何時も平和で、喜び充み、感化は流れて盡きないのである。

▲二十九日(土) 春雨蕭々、市外を獨り散歩すれば、千川邊の櫻は今や既に苔つげんでゐた。

或姉妹より「先生の御祈により不思議な力を與へられてゐます。先生の御加禱を背後に感じて云ひ知れぬ力強さを覺へます……。私が捧げねばならぬものがあれば、どの様なものでも御旨のまゝになりたい心でございます……」との手紙を受けた。

▲三十日(日) 月末で集會はやゝ少かつたけれども滿堂活氣に充たされてゐた。一睡後四家族訪問、夕方喜んで歸つた。自分目下の傳道方針は個人傳道と云はんより寧ろ家族傳道だ。家族から家族と傳ふて行くのでないと、折角の努力も何時しか水泡に歸し易いからである。

某夫人から自分ら夫婦の古稀こきを祝ふべく立派な羽織地を贈られた。厚意多謝、同時に耻かしい思ひだ。七十年來失敗計りして、何ら爲す所もなかつたからである。責せては殘る歳月をモツとく有効に過して其芳志に報ひたいと思ふた。

▲三十一日(月)今日は母の記念日。祭壇に新しい花を飾り、菓子や、果物など供へ、夕は蠟燭ろうそくを點ともして祈りつゝ懐舊の涙禁じ難いものがあつた。昨日別に烈はげしい働きもしなかつたのに、今日はどうしたものが非常に疲れ、さながら頭から重荷を負はせられたやうな感じがした。迷信と笑ふ勿れ、或は亡き母の靈が自分に迫つて來たのではなかつたかなと思ふた。

▲一日(火) 二十年前伊勢の山田で身まかりし山神夫人の母公を記念すべく多数の信者が同家につどつた。予は簡単に左の如く述べた。

「愛は長久迄も絶ゆる事なし」(哥前一三〇八)ヨシンは幾十年、幾百年経てばとて母への我らの愛が絶えぬ如く、我らに對する母の愛も又絶えぬであらう。既に愛が絶えぬとすれば其靈も絶えず依然として意識は存続せねばならぬ。靈はもう疾くに消滅してゐるのに、愛のみ絶へぬと云ふ事は考へられぬからだ。

神の愛も絶えず、母の愛も絶えぬ所に人生の妙味がある。若しそれ此らが年とともに消えて跡なきに到らんか、富みも、譽れも何にしよう。一切は夢である。泡沫である。私共は地上の凡が消滅しても失望はしないが、愛さへ絶ゆる世の中なら、一日でも生きてはゐられないのである」

▲二日(水) 好天氣、五反田より久ヶ原、蒲田、大森邊の各家庭を歴問した。

▲三日(木) 昨日から今日一日内地や滿鮮の讀者、更にアメリカ、カナダ、布哇等の共鳴者達へ約四十通の自筆の手紙を認めた。隨分の骨であつたが、モ一度各地方を巡回し、親しく共鳴者達に遇うて舊交を温めたやうな感じがした。

▲四月(金) 人生の事は幸が不幸か、不幸が幸か一切分らぬ。我らが不幸と嘆く事が、神の眼に

は幸と視ゆるであらうし、我らが幸と喜ぶ事が神は不幸と悲み給ふ事もあらう。従つて表面のみ親て無暗みに怡んだり、悲んだりするは愚だ。不信仰である。

▲五日(土) 雨の中を田園調布から、網嶋邊まで行けば、あゝ何と云ふ美景であらう、桃は未だ七分咲きだが、櫻は満開だ。千朶萬朶。雲とまがう櫻の花盛りは、土手と云はず、丘と云はず、只モウ淡紅の雪が樹上にふりかゝつたやうだ。花の都とは好く云ふた。東京でないとい櫻の國は見られない。

▲六日(日) 夜來雨滋く、急に又寒さが加つて來た。ダガ併し集會は活氣洋溢、次第に新らしい顔が増しつゝある。聖齋は側の如く森儼を極めた。余は贖罪の奥義に就て語り。終つて洗禮志願者の信仰告白會があつた。

何時でも春三四月頃に成ると充血の氣味で、講壇に立ちながら藻掻いたものだが、近頃健康に成つた勢爲か、スツかりそんな憂ひがなく成つて來た。文字通り快食、快眠、快便である。眞に感謝に堪えない。心に驕びあれば健康は自然の結果だ。

▲七日(月) トマス、アクイナスは、萬物盡く動いてゐる所から動かぬ一物(神)あるを證明し、下等動物が何らの訓練も、學習もなく無意識のうちに巧みな業をなしつゝあるのは、其背後

に意識的存在ある證據だと論じてゐる。動物園などで生れたまゝの小猿が、高い木の上に登つて輕妙に飛び廻つてゐるのを見て成程と頷かれる。

澁谷驛頭を飾る忠犬ハチ公の銅像の前で、近頃若い男女が見合ひなどし、無心のハチ公が縁結びの役に立たせられてゐるとの事、終生變らぬ彼の忠節をしのぶからだ。ハチ公は誰知らぬものなき忠犬で、主人公が洋行し、客死したのも知らず、數年間雨の日も、風の夕も驛迄出迎へ、ヤ、暫くして然情と又歸つて往つたと云ふのである。

誰に教へられたのでもない主人への忠節は、神から來てゐなければならぬ。人間は彼らの主たる資格がない。不忠變節、君父に對し、師に對し、恩に酬ゆるに仇を以てするが如きは、犬にも劣つた人面獸心だ。ハチ公の前に頭は擧るまい。が併しハチ公は無意識だ。彼に何の思慮分別があつた譯けではない。彼をしてしか爲さしめたのは神の意識的指導の外ないのである。

▲八日(火) 主が靜かな所に退き給へば、群衆は一層其後を追ッ駆けて集つて來た。祈の爲山にゆき、野で夜を明かし給へば、其結果は直ちに「弟子の大なる群衆及びユダヤ全國、エルサレム又ツロヤシドンの邊より」人々が集つて來たのである。人を己に引付けようとすれば、人は却て逃げて了ふ。退いて神と交り、自己を殺して行けば、群衆は何所からか集つて來る。人間の心は

妙なものだ。

聖週中會堂は明ツ放しで、何時でも來て祈るやうにと勧めたが、少數ながら知らぬ間に來て祈り、又知らぬ間に歸つて往く男女もあつた。新教にはそんな習慣がないから聖週を守る人々は未だ少い。

世田ヶ谷の本田さんとは數年來の交際だが、青山南町に移轉されたとき、今日午後突然尋ねた。芝居で名高い鈴木主水の舊宅であつたとの事、過般海軍中將に昇進、今回經理學校長に榮轉された。

▲九日(水) 終日雨で、寒かつたが、予は獨り神前に伏して聖靈を求めた。萬物復活の事實など考へ、キリスト教が飽く迄希望的で、歡喜の宗教たるを今更の如く悟つて嬉かつた。

▲十日(木) 午前中フト思ひ出し、千住大橋の向ふ側、堀切り菫浦附近の武田姉を訪へば、數日來病臥中との事で非常に驢ばれた。どこで靈化を知られたかと問へば、岡山の靈化會で始めて先生の味を知つたなど云ふてゐられた。

東京に來てから彼は十七八回イースター説教してゐる。一年は一年より六ヶ數くなる計りだ。同じ人々に、同じ題目を語らんとする苦心は一通りでない。夕遅く迄考へたが何も與へられな

つた。

九〇

▲十一日(金) 今朝二時前フト眼醒め、祈つてゐるうち、新らしい思想がトロ／＼と浮んで來た實に感謝に堪へない。宗教界は何も彼も形式化して、古臭く成つてゐる。受難日も、イースターも、活キリストも、靈化運動其物迄も古く成り、死んでゐる。「汝ら何ぞ死にたるものうちに、生けるものを尋ねるや」(路二四・五)だ。かくて二回の説教準備は一二時間で出來上つた。

終日斷食と、祈禱、冥想とに費し、主の御苦みを偲んだ。夕は電燈を消し、薄暗い蠟燭の火で十字架の七言に就て語り、最後に壇を下り頗ぶる平易に、力強く日々の十字架を負ふべき事を強調した。

▲十二日(土) 早朝東郷神社から明治神宮へと巡拜して歸つた。近頃完成した東郷神社は規模は小さいが立派だ。庭園又清楚、如何にも故大將の人格を偲ばしむるものがある。雨に濡れたが櫻は未だ到る所に見られた。

▲十三日(日) イースター、好天氣、新調の青疊香り高く、正面は全部白布で蔽ひ、白百合や、雪柳など美しく飾られた。永眠者記念や、洗禮入會式はいと莊儼に行はれ、靈感の坐に充つるを覺えた。予は元氣好く、主の復活により死の亡ぼされし事を強説した。埼玉縣や、横濱邊からも

集り來たり、近頃稀れな盛會であつた。

▲十四日(月) 會てローサンゼルスで百萬ドルの新築大會堂を視た時、自分は憤慨した。如何に金の喰るアメリカとは云へ、之は餘りに贅澤だと。が併し近頃又考へが少々變つて來た。自分の宅は銘々立派に、綺麗にしながら、會堂の壁は落ち、椅子は壞れてゐても平氣で金を出さうとせぬ信者があるからだ。神の家より自分の家の方が大切なのであらう。

終日疲れ、銀座邊を散歩して歸つた。

▲十五日(火) 靈化冊子校正。

▲十六日(水) 同上。

▲十七日(木) 信仰が確立し、生涯の使命が定まる迄、何を觀、何を聞いても淋びしい。人世が墓場のやうに感ぜられる。ダガ併し一度、それらが確定すれば、今度は又何を觀、何を聞いても面白く、賑だ。在宅校正。

▲十八日(金) 念入りの冊子校正で、眼も、頭も痛めた。訂正又訂正、殆んど際限がない。漸く夕方印刷所へ送り出した。

▲十九日(土) 夕は磯野老夫人の七十七の祝で、予は大略左の如く述べた。

「アブラハムは百七十五歳、モーセは百二十歳迄生きて能く働いた。ジョン・ウエスレーは九十の壽を保つたが、其健康の理由として、第一神に仕ふるとの自覺、どんな場合でも悶々せぬ事空氣の轉換、旅行、朝起き等を擧げてゐる。

孝子は長命し、仁者は壽長しだ。精神と肉體の關係は頗ぶる密接である。神と一致し、人と和ぐ所に健康や長命がある。罪が何よりの毒だ。神は機械的に人の壽命を定め給はず、「汝の信仰汝を醫せり」で、私共の信仰や、意志の如何に依りて長いか、短いかを決定し給ふのである。醫學上最早生きてはゐられぬ危篤の母が、遠方から歸る子供の到着迄存命するのは精神的だ。精神力に依りて體の死に打勝つのである。若しそれ精神力で三日でも、五日でも生きられるものなら、更にそれを幾層倍して五年も、十年も生き延びる事も出来よう。磯野さんのやうな罪のない人が長命されるのは當然だ。七十七は愚か、八十八迄、否九十九までも生きられるであらう」云々。

讀者の聲

▲釜山府西村兄「靈化冊子擴張頒布の件、聖國に召さるゝ時の御土産にも相成候へばと存し心好く引受け努力致すべく候」▲大阪市三善兄「何の價値なき雜誌が榮えて靈的讀物の亡び行くのを悲みます……」▲岡山縣小松兄「靈化冊子第二拜讀「信仰の對象としての基督」特別に新鮮潑刺、活基督の生命躍動、ひし／＼迫り来るを覺へ感激感謝に堪へません」▲大分縣清水谷兄「靈化を通して御懇切なる指導賜はり謹んで厚く御禮……南洋傳道記を拜讀大に恵まれ」▲鎮南浦並利兄「靈化冊子擴張頒布」の件喜んで御引受けします。福音の證人たるべく希ふ一人として聖業の爲に奉仕する事を喜びます……」▲小倉市、濱田兄「刻下の重大時局に際し、老師の御健闘を感謝」▲松山市矢野姉、「……」一字一句……涙なくしては拜讀出来ず……靈化日誌に秋田の名もなき一女性が眞心こめて先生訪問の記事を見て、全國津々浦々に先生を慕ひ、朝夕先生の事業の爲に祈る愛兄弟あるを想ひ」△下關市外、石川兄「時局柄確たる正しい道を擲む事の急を思ひ、只管先生の御高説に頼つてゐます……何卒何時迄もお元氣で御導き下さい」▲釜山府、藤田兄「丁度靈化を手にし（今迄千里遠く感ぜられてゐた主は、次第／＼に近く、果は儼然と私の前に立ち給ふたのであります。其瞬間餘りの嬉しさに、兩眼からハラ／＼と熱い涙が活れ出しました……」に至つて私は何か知らず手にした靈化を机上に置いて感謝の祈を捧げました。先生どうか若返つて何時迄も生きて下さい。先生の生は私の生であります。」▲平壤府、韓昇浩兄「靈化冊子拜讀、靈恩に

預り有難く、爾今毎月拾部宛御送り願上候」△大連市、小館兄「南洋の御傳道に不滅の御足跡を印せられ誠に感謝感激……基督教も全く先生の御信仰の如く日本的に……靈化冊子精々同志に頒ち可申」▲横濱市、平野兄「未だ御聲咳に接する機を得ませぬ。老輩の事とて耳遠く、靈化を通して御教訓に與る事嬉しく……御自愛を祈上げます」△愛知縣、武田兄「愚息の爲に祈り有難く、非常に重態なりしも不思議に快方に向ひ、意識も少しづつ回復し、全く奇蹟と、深く感謝」▲ローザンゼルス市菊池姉「誌上にて御様子拜見、道の爲多忙の御働きに只々感謝……」▲大阪市、小笠原姉「南洋の暑さや、色々の困難に耐えつゝ傳道遊ばされし先生の尊き御姿を想像申上げ感激……」▲廣島縣、生長姉「靈化誌誠に有難く、新しき光と生命を頂き何と御禮の申上様も御座いません……」▲大阪府、久保田姉「御本有難く、大變讀み易く、きつと皆様もさうお思ひの事と存じます私共も一緒に一寸南洋に旅行したやうな気がしました。早速他へも廻送」▲横濱市、矢内兄「靈化冊子有難く御老體に係らず勇猛心を以て南洋迄たゞ感激……此頃新聞紙上「日本的基督教」が非常に叫ばれます、先生が數年前より主張なされた事、先見の明に……」▲同市、福田兄「福音を携へて南洋へ」感謝と興味の内に拜讀有難く拜謝……」▲ハルビン、宮川兄「御本有難く、久方ぶりのことにて一氣に讀上げました。何時もながら先生の熱烈なる戰鬥意識には驚かされました……」▲神戸市、舟曳姉「御本言葉につくせぬ悦びにて拜讀……先生の力強い御勵まし誠に有難く」▲贈撫國高井兄「南洋御旅行面白く有難拜見……マニラの中嶋牧師は小生の親類にて自分も共に行きし感じ……」▲吹田市、島田兄「パンフレット拜見……七月末御出發當時を思ひ出し

感慨深く……恩寵の深さに感泣仕り候……聖餐の嚴守……御期待に副ひ奉り度」▲福岡市、花田姉「パンフレット、先生にお目もじ致しました様な喜び……病後はる／＼南洋迄……涙くましい感激……」▲軍艦香取黒澤兄「死んで生きよ」拜讀、信仰に對し、現在の私の立場と信仰の足らざるための疑問が解けて非常に嬉しく思ひました……私は信者の子でありながら一向教が判らず、母の死が、そして昨年長女の死に遇ひ、信仰の必要を感じ、導きの手を延ばされん事を……」▲市内、齋藤姉「昨日は誠に有難く、イザヤ書の尊き御言に、うなだれきつたる心に如何計りのうるほひを與へられました事でせう。今朝も目さめて今一度拜讀致し新しくされ感謝」▲上海中山牧師「福音を携へて南洋へ」拜讀、傳道について大に教へられ感謝申上げます」▲愛媛縣、戸梶姉「靈化冊子拜見、靈の糧を得感謝」▲廣島縣、有馬姉「靈化パンフレット早速拜讀、酷熱の南洋の御傳道……誠に嬉しく有難く」▲南洋ダバオ、星野牧師「昨年はわざ／＼當地へ御出下され、一同大なる祝福を頂き感謝……私事本年六月頃歸國の豫定なりしも、目下日米關係の緊張せる折から、信者や、在留民を残し自分だけ歸國は心苦しく……來年に延期……」▲福岡市、森兄 貴著「福音を携へて南洋へ」を御授與被成下、直に興味を以て拜見仕候、大兄には老いて益々御健康にて福音の爲御活動の趣珍重至極と存じ敬意を表し申上候……」▲仙台市、柴田姉「福音を携へて南洋へ」有難く拜見、病後の御體を寸暇なき御活動、たゞ／＼頭が下り……」▲大阪市、小阪兄「福音を携へて南洋」誠に難有感謝、一氣に讀破してしまいました」▲福岡市、桂山兄「南洋へ、地圖と共に讀み返し／＼靈眼を開かれ、大なる獎勵を與へられ感謝……」▲大分縣、建林姉「靈化冊子有難拜

讀、非常な感激を興へられました事を厚く御禮申上げます」 ▲南洋ダバオ、塚田師「先生を通して、私が信仰に入つて以來かつてない聖靈をいただきましたことは本當にくうれしくて、せめてもう暫く先生をお引留めしたい思ひで一杯でした」

七月初旬發行

死後の世界

靈化冊子第四

同上

豫告

五月二十四日(土)午後より 二十五日(日)夕迄

春季靈化特別聖會

陰天 府 二十四日(土)午後二時
祈禱懇談會 同 二十五日(日)午前十時
午後七時

巴拉ダイス 同
獄 同

午後七時
午後二時

講場 事務所

武本喜代藏 其他
省線高田馬場下車、淀橋區諏訪二二七靈化教會
時節柄市内の人々は便當持ちか、附近の飲食店にて自由に取らるゝ事、遠來の方々は自分の必要丈の米を持参せられたし、宿泊其他は隨意献金。

國民靈化會々友募集

一、本會の目的は歐米傳來の個人主義、自由主義を排し、我國固有の家族主義の上に立ちつゝ、活キリストを信じ、十字架の大精神を鼓吹し、以て我が國民の靈的精神的向上を計らんとするにあり。従つて教派的偏見を有せず、他と協同一致して此大目的を成就せん事を期す。

二、本會の目的を賛成し、一年參圓以上の献金を會友と稱し、隔月發行の靈化冊子壹部づゝ送呈すべし。會友は海の内外を問はず、互に提携しつゝ目的達成の爲に盡すべく、我らは信仰問題其他に關する質問に答へ、要求に應じて特に代禱し一人として靈的親交を保たん事を期す。

昭和十六年五月十三日印刷
昭和十六年五月十五日發行

靈化冊子三「信仰の世界」

定價五拾錢
郵税三錢

發行者 武本喜代藏

東京市淀橋區諏訪町二二七番地

發行所 靈化事務所

東京市淀橋區下落合一ノ一八

印刷者 石崎宋一

415

215

終

